人類には早すぎた御使いが恋姫入り

TAPEt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人類には早すぎた御使いが恋姫入り

【Ｎコード】
Ｎ７７８７Ｗ

【作者名】
ＴＡＰＥｔ

【あらすじ】
圧倒的頭脳と完璧たるまで自己中心なアイツがげんそうきょ・・・じゃなく、恋姫の世界に舞い降りた。

○話（前書き）

誰と誰を混ぜた感じの北郷一刀です。
一人はわかるけど、もう一人分かったら、あなたは同志

○話

「華琳さまーー！！」

昼頃、桂花が私の部屋に来て私にがっついてきた。

「どうしたの、桂花？昼から積極的ね」

「あれをなんとかしてくださいよーー」

がっついた桂花が指す指を追って桂花が入ってきて閉じなかった扉の方を見てみると、

「……」

彼が何かを持って立っていた。

背筋をびっしりと立てず、少し曲げているのは彼のいつもの癖。

いつも姿勢を正しくしなさいと言ってもどうも直すつもりはないらしい。

「あなた、また桂花を虐めて遊んでいたの？」

「……先に勝負を挑んだのは彼女だ」

「勝負？」

よくみると、彼が持っているのは将棋盤だった。

そしてもっとよくみると……なるほどね。

桂花の駒はほぼ壊滅。これはもう勝負はついていると言ってもいいでしょう。

「お前の国の軍師は劣勢になるとそのまま場面を投げ出して戦場か

ら逃げてしまう可能性がある。これでGが０．００２減る」
「……桂花？」
「ヒクッ！！」
「私の軍師が勝負を挑んでおいてそのまま放り出して来たとは関心しないわね」
「で、でも……」
「でもも何もないわ。だけど…あなたもそれほどにしたらどうなの？」
「どういう意味だ？」
「その将棋盤、もう勝負はついているじゃない。なら、それをここまで持ってきて勝負を片付けるまでもないわ」
「……」

そう言ったら彼は一度将棋盤を観直してこっちを見上げてきた。

「勘違いをしているな、孟徳」
「勘違い？」
「お前は……今この負けている駒が荀？の駒だと思っているようだが……これは【今から】私の駒だ」
「……は？」

どういうこと？

「あいつ……あいつは鬼ですよ。私が涙をこらえながら負けたって認めると、その自分が負けた盤をそこで反対側にひっくり返して、それをまた繰り返して……」
「まさか……」

桂花が負けたと認めると、その桂花が負けたと思った駒を自分が操って、勝っていた自分の駒を桂花に渡して勝負を続ける。そしてそ

れがまた桂花に劣勢になるとまた劣勢になった駒を自分が操って優勢の方に勝つ。
なるほど…それならいくら桂花でも心が折られるわね。
しかし、ここまでしてくれると、やはりあの男、北郷一刀は恐ろしい奴だわ。

彼と初めて会ったのは一年前……

＞pf＜

街から逃げた賊を追撃していた先の荒野に彼がいた。
私が春蘭、秋蘭たちを連れて追っていた三人組の男たちは、この辺りの賊たちの党首であって、私が気がかりして探していたあるモノを持っているという情報があったため、私自ら彼らを追っていたのだけれど……

私たちが近くに着いたときには彼は今のように腰を少し曲げて立っていて、三人はあっちに逃げていった。

「……」

腰を曲げたまま、ズボンのポケットに両手を隠したままこっちを馬に乗っているこっちを見ている姿はどうもこっちを馬鹿にしているようで気に食わなかった。

「貴様！華琳さまの前でその目は何だ！しっかりと立て！」
「……ここはどこだ？」

「何？」
「情報が足りない。ここはどこだ？今はいつだ？お前らは誰だ？」
初めて会って突然そんなことを聞いた彼はそれから私たちが何も言わないからそのまま私たちを通りすぎて行こうとした。
「ま、待て！」
それを見た春蘭が愚弄されたと思ったのか（私もそう思ったけど）馬から降りて彼の行き先に剣を立てて彼を止めようとしたけど、
「…ちょっと通ります」
「は？」
その剣をなんともないかのように彼は曲げた腰をもっと下げてその下をくくって先に進んだ。
「貴様……もう手加減はしないぞ！」
「……俺はうるさいのが嫌いだ」
「貴様ぁーー！」
もう殺す！と決めたように春蘭は自分の剣を振るった。
でも、彼はぶつぶつと何かを言いながらその剣を素早い動きで避ける。
キレた春蘭の攻撃をあんなに簡単に避け続けるなんて、男と云えどもただものではないわ。
「くふっ、こいつ、ちょこちょこ逃げやがってー！」
「ちょっと待ちなさい、春蘭」

そんな彼に興味が湧いた私は春蘭を止めて私も馬から降りた。

「華琳さま？」

そんな私を見て秋蘭を続いて馬から降りて私の側に立った。
私は彼に近づいて彼を見た。
背筋を曲げている彼だったが、それでも私よりは少し目線が上。
普段からそういう目線下にして見る連中にはイマイチ苛立たりしないけど、この姿勢はどうも忌々しいわね。
だけど、今はそれより彼に興味があった。

「ここがどこか知りたいって言ってたよね。ここは陳留よ」
「……ちんりゅう？」
「そう、そして私は陳留の刺史、曹操よ」
「ちんりゅう……しし……？州の陳留……？」
「そうよ」
「……お前の名前は…何？」
「貴様！華琳さまに……」
「私の名前は曹操、字は孟徳よ」

春蘭は怒るけど、私はもう一度彼に私の名前を言った。

「そうそう……孟徳……陳留の刺史……乱世の奸雄……」

そう私が言った言葉から、私がいっていない言葉までぶつぶつ言い始めた彼は私から目を逸らして、春蘭や秋蘭に目を送った。

「女性の……三国志…曹操……夏侯惇に夏侯淵…」
「「！！」」

私の名前を聞いただけなのに、二人の名前まで分かるなんて…
春蘭ならまだしも、秋蘭は私が刺史になってから個人的な家臣。外に名が出てはいないはずよ。

「貴様、何故私の名を知っている」

秋蘭もそんな彼を警戒しながら聞いた。

「……ふふっ……ふふふっ」

そんな秋蘭の声には反応せず、彼は不気味に笑い始めた。

「ふふふふふふふふふふっ」

「答えろ！」

ギシッ

矢を射て彼を脅かそうとする秋蘭、春蘭も彼の異常的な行動に私を下がらせて前に立った。

「…ふふふ……」

そして、彼は笑うのを止めて空を見上げた。
そして……

「興味深い＞＞ぼそっ＜＜」

そう呟いた。

「華琳さま…こいつはどう考えても危険です。ここで仕留めたほう

が……」
「……ちょっと待ちなさい、春蘭」
彼が奇人なのは分かったわ。だけど、それでは春蘭の攻撃を避けたわけにはなっていない。
まだ何かあるわ。
私の胸に興味を沸かせる何かを、彼は持っている。

「あなた、名前は何かしら」
「……ほんごう…かずと……」
「ほんごうかずと？」
「北郷一刀…年は拾八、米国マサチューセッツ工科大学博士学位修了中。今から１８００年の後から来た者だ……そうか、あのタイムマシーンは成功したのか。あれほどの不確かな情報を得てしてここまで積み上げられたとは…流石数学の力は偉大だ」
「……？」

正直、彼の名前と年齢以外には何一つちゃんと聞き取れなかった。

「華琳さま、こんなやつにこれ以上興味を持つ必要もありません。さっさと連中を追って……」
「お前…曹孟徳と言ったな。だが、彼女はお前に違う呼び方をしている。何故だ？…予想するに何かの愛称か？」
「真名を知らないの？」
「まな……それはまなという風習か。……なるほど。人に大いに知らせる名前とはまた違う名を小規模に使うことで、自分と近い集団の人たちの間の信頼を深め、自分の有様を隠すことなくさらけだせる相手を作る……見事な選別道具だ」
……どうやら彼はこの大陸の者ではなさそうね。

「お前は……」
「貴様！それ以上華琳さまに近づくな！」
私の近くに来ようとする彼を、横から春蘭がぶんと殴る。
春蘭のおもいっきりの拳を食らった彼は砂の上にニ、三回転んでは止まる。
死んでないかしら。
「華琳さま、もう戻りましょう。あんな奴、相手をしている暇なんてありません」
「私もそう思います、華琳さま。どうも危険な匂いがします」
「秋蘭もそう思うのかしら。私も彼からは何か危険な匂いがするわ。……だけど」
そこがいいのよ。
「！」
「……」
と思っていたら、いつのまにか倒れていたはずの彼は私たちの前まで来ていた。
だけど、今の彼の目は私じゃなく、自分を殴った春蘭に向かっている。
「…お前が曹操を変な人から守ろうとするその気持ちはわかる。だが、……
一回は一回だ」

ぶっ！

「！」

「姉者！」

そう言った瞬間、彼は春蘭の腹部を足で加撃した。
剣で急いで防御したにも関わらず、砂場だったせいか勢いにてすこし下がる。

「貴様…！」

「＞＞スッ＜＜」

彼はまた春蘭の剣を避け始めた。
だけど、今度は少し難易度が高い。

サシュッ

「＞＞すっ＜＜……陽動か。暗算でも足りるかわからん」

秋蘭が矢を撃ってくる。
春蘭の剣を避ける先を狙って矢を打つ秋蘭の技も見事なものだけど、
そんな先まで呼んでまた彼は矢と剣を同時に避けている。

「たああっ！」

「＞＞サシュッ＜＜」

「＞＞スッ＜＜＞＞スッ＜＜」

手はポケットに詰めたまま、目線は剣を振るっている春蘭を少し下から見上げて、同時に秋蘭の動きにも注意して道先を考える。

まさか……

「二人とも得物をしめなさい！」
「華琳さま！」
「華琳さま、しかし姉者が…」
「二人とも私の言うことが聞けないの？二度も言わせないで頂戴」
「「……」」

二人が剣と弓を下ろすと、彼の目がまた私に向かってくる。

「……言葉だけで将たちが己の恨みを後回しして命令に従う」
「当然よ。彼女たちは私のものなのだから」
「……そういう考え方は、きっと戦場では己に有利なものになるだろうな」
「そうね。そういうあなたこそ、なかなかすごいわね。二人の攻撃を同時に読みながらそこまで把握しているだなんて」
「……興味深いな」
「ええ、興味深いわね。とても…」

彼は私に興味を持った。
そんな彼に私も興味を持った。

私たちの関係はそこから始まった。

一話（前書き）

あくまでも興味深そうだったから…

一話

場所を変えて、私たちは陳留の街の料理店にいた。
椅子に座った彼は素足だった足を椅子に上げてとても見た者が不安になる座り方をした。
直しなさいといっても「この姿勢をした方が集中力が４割ぐらい増す」とか言って変わらなかった。

「この時代人間は場所から場所へ移動するために足で歩くか、それとも馬のような足の早い動物を用いて移動する。そして、未来に至っては、馬よりもより早く移動するため車や飛行機という鉄で作られた移動手段を発明した。こういう速度を早くして空間を移動する手段らはある意味時間の流れを遅くする効果を持っていると言える。同じ距離を移動することにより短い時間を使うことにより、未来の訪れを遅くしているのだ。ここで速度をより早くすると、例えば、光と同じ速度で移動するとしよう。そうすれば、時間は進まなくなる。未来は来ない。永遠に今という時だけが存在する。ここで更に加速すると、時間は過去へ動く。この仮説を利用を我々は実験をし、そして俺はここに来た」
「……」
「理解したか？」
「あなたがまともな人間じゃないということはわかったわ」

何を言ってるのかさっぱりよ。

「…秋蘭、こいつは一体何を言っているのだ？」
「……悪い、姉者。私にも良くわからない。」

とはいえ、同じ言葉で話をしているはずなのに、彼のいっていることの半分も、私たちは聞き取れなかった。
やはりこの男、凡人ではないわ。

「補足説明すると…そうだな、長江の水の流れを時間の流れとしよう。例えば、長江の水の洪水によってすごくその流れがとても早くなっているとしよう。その流れは時間の流れと同じで、上から下へしか移動できない。が、その流れを遡るほどの推進力を持った船があるとしよう。さすれば、その船に乗って水流に逆らって長江の上流に行くことができるというわけだ」
「つまり、あなたが使っていたというそのだいむましぃんというのが、時間の流れに逆らうための船。そういうことね」
「そうだ」
「なら、そのたいむましぃんというのは今どこにあるの？」
「わからない。時の流れで崩れたか、それとも最初から俺だけがここに落ちたのか。どちらにせよ、この世界は俺が単純に知っている過去の世界とは違う。いわば長江を遡っていたつもりが、気がつけば黄河だったという話だ」
「…わけがわからないわ」
「貴様、我々が知らないと言って適当な言葉を述べているのではないのか」

春蘭が自分に理解できない話が続くとイライラしてきたのか殺気を立て彼を見る。

「言ったはずだ。たいむましぃんというのはまだ試作品で不安定であった。俺がそれに乗ることになったのも事故によるもの。俺もどうなっているのか完全な説明をすることはできない」
「……ぐぬぬ」
「…秋蘭、あなたは彼をどう思うかしら」

一刀がどこから来たのかその話はもう頭が痛くなりそうだから後ほどするとして、私は秋蘭に彼を見た感想を聞いた。

「…妖しい者だと言うことは間違いありませんが、特に害になるような者でもないでしょう」

「それだけ？」

「……私と姉者の攻撃を同時に避けながらも彼は余裕を持っていました。かなりの武を持っています」

「俺は武人ではない」

「…何？」

一刀の言葉に私たちは驚いた。

「ふざけるな！我々が武人でもない奴に手間取っていたというのか！」

「…研究をするためにはまず基本的な体力を持つことが必要だ。自分の考え通りに動ける肉体を持つこと。それが出来なければ人間は己が力の半分も出すことができない。が、特に武術を磨いているとか、そういうことはしていない」

「……」

「君たちの攻撃が避けられたのは、その攻撃の軌道や次の動きを計算し、ならそれをどう避けるべきかを頭で考えていたからだ」

「……彼女たちの動きを全て予想していたですって？」

「そういうことになる」

信じられないわ。

戦いにとって相手の動きを読むことは当然必要なことだけど、彼はそういう段階じゃなかった。

完全に相手がどのような軌道で剣をふるって、どのように矢が飛ん

でくるかを全て予測した上で、それをその短い時間で判断して避けた。
とても人間にできたことじゃない。
「一刀、私の元で働く気はないかしら」
＞pf＜
欲しい。
欲しいわ。その腕。その頭脳。
「華琳さま！危険です。まだこいつが本当に妖の類でないと決まったわけでも…」
「春蘭、何を言っているの」
「…華琳さま？」
「時間を遡って来たと言っているのよ。妖に決まっているじゃない」
「なっ！なら何故……」
「例え妖な術を使うとしても、我が覇道に必要であれば使ってみせるわ。それが私よ」
「華琳さま……」

自分でもちょっと狂っていると思っていた。
だけど、欲しい。
この者をここで逃せば私はきっと後悔するでしょう。
こんな面白いもの、拾った者勝ちよ。

「……曹孟徳の将か。悪くない」
「なら…」
「条件がある」
「貴様、華琳さまからの直々のお誘いに…」

「姉者、少し落ち着け」
姉を抑えた秋蘭だったが、その顔に不安の色は隠せなかった。
その分、彼はまだ信用できないものだった。

「言ってみなさい」
「まず、ここにある書物を全て読ませてもらおう。過去の書籍というのはすごく興味深そうだ」
「…なるほど。わかったわ。他には？」
「それと、孟徳、君が出る戦場には必ず俺を参加させろ」
「…それは何故？」
「英雄曹孟徳の戦だ。一つ一つが良い資料になるだろう」
「…結構よ。こっちからもそのつもりだったし」
「そして最後に一つ」
「まだあるの？」
「俺が欲しい時に甘いものが食べられるようにしてくれることだ」
「…は？」

最後のはちょっとわけわからなかった。

「甘いものがないと頭が回らない」
「……いいでしょう。ただし、あなたの頼みを三つ叶ってくれたからこっちからも三つ言わせてもらうわ」
「……妥当だな」
「まず、あなたが持っている知識を私のために最大限に使うこと」
でないと彼を使う意味がない。

「……俺が知っている歴史に反するようなことはできない」
「構わないわ。後、私にあなたが知っている歴史というものは言わ

ないこと」
「…俺の持ってる知識を最大に利用するのではなかったのか？」
「自分が行く道は自分で決めるわ。例え歴史が既に決まっているとしても、私の行く道が私が決める」
「……同意しよう。最後の一つだ」
「そうね。最後は……私のことはこれから孟徳じゃなく華琳と呼びなさい」
「華琳さま！？」
「……興味深いな」

最後の条件を聞いた途端、春蘭は立ち上がり、一刀は目を丸く開いた。

「こんなものに真名までも……！」
「…華琳さま」
「あなたたちにまで強制するつもりはないわ。ただ、これは私なりの意志よ。彼はこれから我が軍にとっていい戦力になるわ」
「…その真名という風習。とても興味深く思ってはいたが…なるほど、それを許すことで自分の相手への信頼を示す……確かにいい道具になる」
「で、あなたはどう思うかしら」
「結構だ。ただ、夏侯惇が俺がお前の真名を呼んだ途端頸を切り落とす体制をしている。この距離だと流石に分かっても避けられないぞ」
「春蘭……」
「ですが、華琳さま！」
「……私が決めたことにどれだけ文句を言えば気が済むの？＞＞ゴゴゴー＜＜」
「っ！！」

私はわざとらしくそこで覇気を出した。
春蘭は私の気迫に圧されて肩を落とした。

ガタッ！

「！」
「大丈夫か、北郷！」

と思ったら、突然一刀が座っていた椅子から落ちて倒れた。

「ちょっと、大丈夫なの？」
「……」

返事がないわ。

「秋蘭、これは一体どういうこと？」
「……信じがたいですが、恐らく華琳さまの覇気のせいで気絶したのかと」
「……」

春蘭と秋蘭の攻撃をあれほど簡単に避けられるというのに、ただ数秒発した覇気には耐えられないですって？

「如何致しましょうか」
「……春蘭」
「はっ」
「一刀を城まで運びなさい。先の私に逆らった罰よ」
「うぅっ…わかりました」
「秋蘭は部屋を用意して。後侍女を付けて目を覚ましたら私のところに伝えるよう…」

「…ほんとにこの者を信用しておられるのですか？」
秋蘭までそんなくどいことを言うつもり？
「あなたも私に逆らうつもりなの？」
「そうではありませんが、ただ、北郷この男について、華琳さまはあまり過大評価しているのではないのか心配です」
「ありがとう、秋蘭。だけど、私はもう決めたわ。それに、」
「……？」
「男が私の目に叶ったのよ。これほど面白いことはないわ」
「……はぁ」
「わかったなら、さっさと行きましょう。起きると直ぐに彼が望んだ通り書庫を紹介してやりなさい。甘いものの手配も」
「御意」

＞pf＜

それから何刻が時間が経った頃だった。
政務に集中していた私は、突然入ってきた秋蘭を見て動かしていた筆を止めた。
「秋蘭、どうしたの？」
「はっ、北郷が気を戻しました」
「そう、随分遅かったわね」
「…いえ、目を覚ましたのは随分と前のことなのですが……」
「？」
じゃあ、どうして今になって私に……

何か、秋蘭の顔が複雑になってるわね。

「言いなさい」

「はっ、北郷を書庫に案内したのですが、書庫に入った途端、棚一つにささってあったの本を全て持ち出しては、それを凄まじい速度で読み始めまして……今頃書庫にあった本の二割ぐらいが彼が座っている卓に積もっている状態です」

「なんですって」

自慢じゃないけど、陳留の城の書庫にある本の数は都の書庫にも負けないぐらい詰めてあるつもりよ。

私はもちろんそこにある本は全部読んでいるけれど、それの二割をたった半日で読み出すですって？

「書庫で働いている文官たちが整理してはいるのですが、彼の読む速度に間に合わずに悲鳴を上げています」

「……面白いわね」

ほんとに想像通り、いえ、想像以上の男のようね。

もし彼を軍師や政略家として使うことができれば、秋蘭も軍部と政治の仕事を両方任せなくても済むかもしれないわ。

「放っておきなさい。書庫には余力があるところから何人か助けを入れといて」

「はっ」

だけど、そうね。

少し見てみたくなったわ。

「必要な本もあるし、少し見に行ってみましょう」

「よろしいのですか？」
「何？単に必要な本を探しに行くだけよ？」
「……」
ふふっ、嫉妬する秋蘭もかわいいわね。
＞pf＜
パラパラパラパラパラパラっ
「……暗いな」
「……すごいわね」
聞いた通りの光景だけど、目で確かめると尚更その凄さが分かった。
料理店の時のような座り方をして本を片手で持ったまま、もう片手は常に本の次の枚を開き続けていた。
一刀の座ってる席の両側には書籍が山ほど積もられてあって、それは書庫の本棚いくつを完全に詰められるほどの量だった。
「この本をたった数刻で全部読んだというの？」
「この時代の書籍は文が少ない。その意味は深みがあるが、無駄なところも多い。無駄なところは通りすぎて必要な情報のみを吸収しているつもりだ」
「……」
彼が読んでいた本の中で一つを取ってみた。
孫子の一遍だった。
「故に善き將の者、人形せしめて我形無ければ、則ち我専らにして、

敵分かれる」
「我専らにして壹と爲す、敵分かれて十と爲らば、これ十を以て壹を撃つる也。我寡くに而敵衆だとしても、寡を以て衆を撃つ者、則ち吾と興に戰う所の者約なればなり」
途中の部分を読んだだけで、次のところが出てくる。
「意味は？」
「少ない兵を持って多い敵を叩きたければまず敵にこっちの情報を与えないことで軍を分散せざるを得ずするべき。十を持って一を叩くとしても、その十を十に分散して戦えば数の利は得られないもの。重要なのは数ではなく、いかに持った軍を必要なところに集中させることができるか」
「すごいわね……」
一読みしただけで完全に理解しきるなんて…
「何がしたいのだ、曹孟徳」
「へ？」
「俺の能が試したければこんなくだらない書物でなく、実践で確かめることだ」
「……たしかにそうね」
単に孫子を一読しただけで覚える能を見たくてあなたを得ようとしたわけではないわ。
「それともう一つ」
「何かしら」
「……読書中の俺の前に影をつくるな」
「なぁっ！」

驚く私の姿は気にもせず、彼はまたパラパラとすごい速度で本を読み始めた。

＞pf＜

あのまま読書の邪魔をするのも悪かったので、さっさと用事だけ済ませて出てきた。

「華琳さま」

「……」

「いくら華琳さまの命だとしても、あなような無礼な行動、許すまじです」

「……」

「彼が奇人だということはわかります。華琳さまが興味を持つことも無理はないでしょう。ですが、彼をずっとここに置くことについて私に意見を言って頂ければ、私は反対です」

「……押されてたわ」

「…はい？」

「この私が、私の一瞬の覇気も受け入れられなかった男の気迫に押された」

益々面白くなってきた。

「秋蘭」

「はっ」

「明日何でもいいから彼に現在陳留の政にて関係のある仕事を渡しなさい。その仕事を見て、彼をこのままここに居させるかそれとも

あなたのいう通り追い出すかを判断しましょう」

「……御意」

さぁ、あなたが言ってた通りにしてあげたわ。

これから私にあなたの能を見せなさい、一刀。

・・・

・・

・

二話（前書き）

ちょっとくだらない閑話。敢えていえば秋蘭√。でも拠点として別けません。

二話

「街の治安改善案か……」
「そうよ、あなたが願っていいた政務の懸案よ。それは下の文官の人から上がってきた初案だけど。あなたにはそれを完成させて欲しいわ」
「……」

チャラチャラと、彼は初案が書かれてある竹簡を見た。
初案と言っても、問題点に付いて述べただけで、詳細な改善策はない。

「＞＞パラパラ＜＜実務的な内容。だけど、重要だ。実務に動いている文官だからこそあげられる案たちが多い。将級の人材も有用だが、こういう中間管理職が充実していることもまた内政には良いだろう」
「で、どうかしら」
「何が？」
「その案よ。具体的にできるかしら」
「いや、正気か？」
「はい？」

チャラ

一刀は竹簡を私に返して言った。

「俺は街にちゃんと出てみたこともない。あんな問題点いくつ述べられたところで改善案が出せるはずがない」
「…では、あなたはどうするつもりかしら」

「一週間だ」
「それ以内に案を出せると」
「もし俺がここでいい案を出してくれなかったら、どうする？」
質問に質問で答えることがあまり気にいらなかったけど。
「その時はあなたを追い出すわ」
「……俺が本当にここに残るためにお前のためにいい案を出してあげると思っているんだな」
「……あなたは私に興味を持っているわ。あなたも私の興味答えてくれないと困るもの」
「……曹操孟徳、やはりあなたは中々興味深い人だ。その期待に答えるとしよう」
タッ
彼はそう言ってあの危うい姿勢の座り方からまた見る人を不安にする立ち方に戻った。
「一週間、その間俺がどこにいて何をするか構うな。俺はお前のために働く。それが重要だ」
「いいでしょう。一週間よ」
「一週間」
彼はそう言って私が残っている自分の部屋から姿を消した。
＞pf＜
その夜。

「一刀が部屋にもどっていない？」
あいつ何してるのよ。
「城の中には恐らくいないかと。如何しましょう」
「…ほっときなさい。彼がやりたいようにさせればいいわ。どうせ一週間以内に案を出してくれないと、彼の部屋なんてなかったことになるでしょうから」
「それが……」
「…何？」
「彼の部屋の手紙にこういうものがありました」
秋蘭は私に竹簡を渡した。
それを開けてみると、

『帰ってきた時にはもっと広い部屋がいい。今の倍ぐらいで、寝台とかはなくていいから部屋の壁を全て黒板にするように』
「……いい度胸してるじゃない。分かっていたけど……」
「華琳さま、城の者たちの中からは彼について良くない噂も流ているようですが…」
「あら、能力があるものを私が重用することに不満があるというのかしら」
「彼にはまだ実績がありませんから」
「なら、その実績はもう直に出来るわ。これから誰も彼の寄行に文句を言えないほどね」
「はぁ……」
どうやら秋蘭もまた、私が一刀に対して寛大にしていることに不満があるようね。

「秋蘭、明日は街の警邏に回りなさい」
「はい？」
「他の仕事は後でいいわ。明日は警邏だけで構わないから、良く見てきなさい。彼がどういう人物かを…」
「…わかりました」

＞pf＜

秋蘭ＳＩＤＥ

「華琳さまの気まぐれだとばかり思っていたが…まさかここまでなるとは思っていなかった」

華琳さまの命令通りに街の警邏を兼ねて北郷を探していたが、朝中回っても彼の姿はまだ見えない。

「こそ泥だーー！！」
「！」

泥棒か。

「ええい、退け退け！」

素早い動きで、泥棒は奪った財布を持って街のあっちこっちをくぐっていく。
街の警備隊が出動したが、あっちこっちに逃げまわる泥棒を捕まるに皆手間取っていた。
なによりも人手が足りなく、警備人たちの動きも鈍い。
あれでは、泥棒の方も余裕をぶってしまうだろう。

「あそこに樽が見えるだろ」
「！」
その時、横から姿を表した者が居た。
「あの樽は魚屋のもので、中には捌いて使わなくなった魚の内蔵や骨などが入ってある。たまに猫たちが落ちて大変なことになることもありそうで、強く封じて店の一隅に置くのだが、今日は何の訳が外にあるな」
「北郷！何故お主がここに居る」
「俺は警備隊に再就職してだな。今はあのこそ泥を捕まるために動いているわけだが……ああ、見えるか。あの屋根の上の猫」
「何を……」
「猫は樽を狙っているんだ。そして、こそ泥もまたあの樽を踏んで屋根の上に上がろうとするだろう。で、結果的には」
シャーーーー！！！！
「うわぁっ！！」
バカーーん！！
「キャーー！何！」
「うっ、くさっ！何の匂いだ」
「ほら、捕まえたぞ」
「うっ、生くさい。早く連れていけ」
逃げていたこそ泥の顔に運悪く猫が落ちて慌てたこそ泥は前にあった樽にぶつかって倒れて、樽は壊れて中の内蔵や骨が街の道に垂れ

流れた。
「街が少しくさくなる問題点はあったが、目的は果たせたな」
「まさか、あの樽をあそこに置いたのが……」
「偶然の産物だ。俺がやったことはただ、あのこそ泥があそこに向かうように兵たちを動かせただけだ」
「何？」

警備隊の人たちが彼の言う事を聞いたというのか？

「俺の言う言葉に従うわけではない。街の道のりを計算して、また警備人たちがどのようにこそ泥を捕まろうとしているかを判断する。それを逆手にとって動くだけでも他の人たちの制限的合理的な判断を操ることが出来る。……兵卒一人が将の判断を紛らわすことが出来ると言ったら、きっとお前は信じないだろうけど、出来る。その兵卒が将よりも優秀であることが前提だがな」
「……一つだけ訊こう」
「なんなりと」
「何故敢えて樽を壊して街の人たちに迷惑になる方法で相手を捕まえたんだ？お前の言う通りなら他にもいい方法で相手を掴まえられたはずだ」
「理由は二つ。まずこの警備人たち、全く練度が低い。街の基本的な図が頭にない連中も多い。そんな状況じゃ、普通な方法では素早い泥棒を捕まえることなんてできない。だから、逆に、泥棒の動きを止める方法が必要だった」
「それで、あんな汚い方法を使ったというのか？」
「そうだ。またもう一つの理由は……」
「…何だ？」
「あの魚屋の人が随分とケチな人間でな。樽の中のものを猫たちに渡そうとしない。それであの辺りの猫たちが随分飢えていてな。そ

れで……」
「…あ」
さっき樽が壊れたところを見ると、猫たちがあっちこっちから現れて魚の頭や内蔵を取っていった。
「猫も生きなくてはな」
彼はそこまで行って自分がやらかした状況をまとめるために他の警備人たちのところに向かった。
「……」
＞pf＜
「ずっとこんなことをしていたのか？」
「こういうこと…とは？」
状況が大体まとまった後、私は北郷を呼び寄せてそう聞いた。
「孟徳は街の治安改善案を俺に頼んだ。が、報告書にある内容のみでは情報が少なさ過ぎた。だから、自分の脚で歩きながら情報を得る手段を取った。最初は警備隊の中に保管されてる報告書をすべて読んでみたが、この時代の報告書とやらはどうも俺が欲しがる情報は入ってなかった」
「それで、自分の足で歩きながら現状を探ったということか？」
「半分は合っている」
「半分？」
そこまで言って、彼は来ていた警備隊ようの装備を外した。時は昼

過ぎで、一番暑い時期だった。

「たしかに警備隊の現状確認というものもある。が、俺が確かめたかったのは他にあった」

「何だ、それは？」

「この街自体の状況だ」

「？」

彼の言うことが少しわからなかった。

「今この街は、あまり計画的な拡張の仕方をとっていない。その中段々街の道のりが複雑になって、そのため警備のものたちも街の道がどうなっているかをちゃんと知っていなかった。これではいつの日になると、陳留の街は一度入ったら元あった場所に戻れない迷路になってしまうだろう」

「あ」

たしかに、最近華琳さまが治めるこの地域に賊があまりないせいか、人口の移動が激しくなっていた。そのため、街の拡張政策やらが現状に追いつかなくなり、その中街が勝手な形に拡張されたことがある。

とてもじゃないけど、人手がなりなく、それで彼にこの問題を頼んだこともあるが、この短い時間で、彼はその問題は発見したというのか。

「これなら、治安を維持するには、まず人の輸入を止める必要がある。まずはこれ以上人が増えることを止め、段々状況をまとめなければ…」

「それは駄目だ」

「……単に兵を増やすために？」

「……」

たしかにそれもある。
今の私たちの軍の数はまだ少ない。
兵を集めるには、それほどの人口の増加も必要だ。
この時期、陳留に来る人を止めることは、これ以上兵を増やすことが出来なくなることでもある。

「…まぁ、いいだろう」
「何？」
「そういうことは既に予想済みだった。どうせ、君たちは現状を知っていながらもその事のためにこの問題を見逃していたのだろう」
「……」
「だけど、この問題を今解けなければ、出口がない膿はいつか周りまで腐らせる。それを知らない君たちでもまたないと思うが」
「……」

とは言え、このことばかりは、なんとしても言い案が出れるものではなかった。
人を防ぐと言えば話は簡単だが、それではこの乱世の中、華琳さまの夢の叶う道が遠くなってしまう。
それだけは駄目だ。

「私は華琳さまの覇道を支えたい」
「……わかった、妙才」
「！」
「君のその盲目的な考え方は、いつか孟徳の覇道を防ぐことになりかねない」
「なっ！！」
「それもまた、曹孟徳の用兵次第と言ったところだが……こうなる

とどうしても曹孟徳に付いてはもっと観察する必要がある」

シャキン！

彼の言葉には関係なく、私は彼の頭に矢を射ていた。

「今の話、訂正してもらう」

「……君のそのような考え方が、いつか孟徳の覇道の邪魔になる」

「まだ言うか！」

「君たちは主人の過ちを正すことが出来ない。故に、孟徳が間違った道を行って足を掬われると、自分の命を賭けて彼女を守るだろう」

「当然のことだ」

「だが、其の次も孟徳が同じ道を行けるとは考えにくい」

「！！」

「まだ孟徳についての情報は少ない。が、人間最初は強く始めるも、仲間を失えばその志は濁ってしまう。その時ただ盲目的に孟徳の志をしたがってばかりだったお前たちが、孟徳を助けることが出来るとは考えにくい」

「……」

「その矢で俺の頭を撃ちぬくことは構わない。でも、君に本当に孟徳を最後まで支えたいという気持ちがあるのなら、もっと柔軟に考えるべきだ。一面彼女の道に邪魔になりそうに見えても、実はその道決して遠回りではない。むしろ、近道にもなれる。それを考えることができないのなら、この先その口から孟徳を支えているとは言えないだろう」

「……！」

さしゅっ！

矢は、北郷の頭から外れて地面を撃った。

「残った日は後わずかだ。もし結果がでなければ、貴様はこの軍から放り出されるだろう」
「……答える価値を感じないな」
「何？」
最後に俺を通り過ぎながら彼は言った。
「孟徳は俺の才に興味を持っていると言った。もし彼女が俺を放り出すとすれば、それは彼女の言った言葉が嘘だということ。だが、俺が知ってる限り、彼女の才ある者を好むという気持ちは本物だ君のような家臣が彼女の側にいることがその証拠だ」

＞pf＜

一週間後、

「この街ではいくつか興味深い状況が起きていたが、まず問題になるのは使われている警備人たちの質だ。ちゃんとした指揮体系が取られていないし、何よりもちゃんとしたマニュアル、状況に対しての定型化した対処法やらが具現されていない」
「それで、警備の人たちの質を上げる必要があるって」
「もちろん。まず警備人の質が上がらない決定的な理由は金になら

ないからだ。警備人の仕事は忙しく大変な上に収入が少ない。すくなくも今の倍はあげないと彼らが自らを成長させるアトラクション……彼らの成長を推奨することができない。だけど問題はまだある。この城が信じられないほど貧乏だということだ」

「貴様、華琳さまの街の治めが良くないというつもりか」

「少なくもこれは言える。警備人たちに与える金を増やさないと、街の治安改善なんて夢物語だ」

その後、北郷が出した改善案はとても難しいものであった。

だけど、不可能というものではなかった。

私や華琳さまは、彼の力量を試すために彼にこの政策の発案を頼んだが、こうなってみると本当に力量を試されているのは私たちの方になっていた。

「これより良い策ならいくらでも出せるが、これが現状にて一番の効果があると見た。これもできないとすれば、君たちの軍が俺の期待以下だということだ」

「貴様ー！」

「待ちなさい、春蘭！」

華琳さまは今でも北郷にかかろうとする姉者を止めた。

「秋蘭、北郷の案をどう思うかしら」

そして、私に意見を求めた。

さて、どう答えるべきか。

姉者があのように反対の色をだしている時、私も彼の案を否定的に見れば、この案は通るはずがない。

そして、北郷は軍から放り出されるだろう。

「北郷の案の通りだと、たしかに陳留の街は今よりはるかに発展する上、治安も改善することができると思います。ですが、これほどの政策を進めるにはそれほどいい人材も揃わなければなりません」
「で、私たちの軍では無理だと？」
「いいえ」
「？」
「北郷は我らの軍の先のことも見てこの策を練っています。これから、我が軍には華琳さまの覇道を支える人材たちが集まるでしょう。そうすれば、これほどの案、難しいものでもありません」
「そう……我らの現状だけでなく、この先の私たちの成長ぶりに備えた、長期的な案ということで」
「はい」

ふと、私が北郷を見ると、彼は驚いた顔で私を見ていた。
彼が何かをぶつぶつと言っていたが、聞こえなかった。

「いいでしょう。この案、あなたに任せるから、実行なさい。あなたを警備隊隊長に任ずる」
「了解した」

その後、北郷は正式に我が軍の一員となった。

三話（前書き）

○話でいじめられた桂花ちゃん登場であります。

三話

「……」

タッタッタッタッ

「……」

パラパラ

「……」

タッタッタッタッタッタッタッタッ

「……」

がらり

「一刀」

「……」

私が部屋に入ってみると、一刀はまたその黒版だらけの部屋の中で白い粉末が満たせながら何かに熱心であった。

パラパラ

「ちょっと、一刀」

とは言え、私が入ってくることも知らないでいるなんて、いい度胸

じゃない。

「貴様、華琳さまを無視するつもりか！」

一？に来た春蘭はもう大分頭に来ているみたいだけど。

タッタッタッ

「貴様ーー！！」

ガーン！！

＞pf＜

「今回はあなたが悪いわ」

「……納得行かないな」

「まだ言うか、貴様！」

「……もうすぐで完成だったというのに、元譲のおかげで最初からやり直しだ」

「貴様が華琳さまを無視していたのが悪いだろうが！」

「…大体人の部屋に入って来るときは中の人に断ってからするのが作法というものだ」

「は？何だ、それは」

「へー、あなたの世界ではそういう風習があるの」

一刀は春蘭が暴れたせいで壊れてしまった門を立てて、その門を手の甲で何度か叩いた。

「こうやって中の人の外で人がまっていることを知らせる。ノックというものだ」
「へー、そうなの。で、あなたは直接声をかけても知らなかったくせに、そののっくというものの音では私たちに気づくことができたですって？」
「……それよりだ」

逃げたわね。

「部屋に入ってきたからには用事があるはずだ、孟徳」
「ええ、実は隣の街で盗賊が襲撃したという報告が来たの」
「…孟徳が治める地にか」
「馬鹿な！華琳さまの治める所に、そんな奴らがいられるわけがなかろう！」
「陳留から少し離れている場所で、他の刺史が管理していていた所なのだけれど…」
「逃げたか」
「ええ、まったく、みっともない無能ぷりよ」
「……それで、出るのか」
「ええ、もう準備は済んでいるわ」
「…いいだろう。孟徳の指揮を直接体験するのも、またいい資料になる。興味深い話だ」

一刀はそう言いながら壊れた机の中でいくつかの書物を私に渡した。

「これは…？」
「軍の訓練内容改善の初案だ。この内容通りなら、軍の練度を今の3割以上上げることが出来るだろう」
「なんですって」

こんなものを……

「さっきまでそれの具体的な案を練っていたが…元譲でせいでなくなってしまったから取り敢えずそれだけ渡そう。軍師にでも渡しておけば参考にしてくれるだろう」

「……へ？」

「……？俺は何かおかしいことを言ったのか？」

「あ、いえ、その……」

そうか。一刀はまだ知らなかったわね。

というか、聞かれて無かったわね。

「私の軍には、まだ軍師と言えるような者が居ないのよ」

「……」

＞pf＜

秋蘭ＳＩＤＥ

「我が軍の軍師……か」

「……ほんとに居ないのか」

「…恥ずかしながら」

仕事中だった私のところに咄嗟に入ってきた北郷は私に軍師について聞いた。

我が軍には未だに軍師が居ない。

華琳さまを軍師として支える者、それほどの人材がまだ見つかっていないのだ。

「元譲は見た目がアレだし、妙才も、姉の抑え役に回ることがせいぜいだと判断していた。そんな現在、軍師が居ないということは、孟徳の覇道には手足はあれど頭脳がないにものだ」
「……お主は、軍師になるつもりはないのか？」
「……興味深い話を言うな」

北郷は俺の机の上に顎を乗せて私を見上げながら言った。

「以前までは俺を警戒していた妙才が、俺に孟徳の頭脳になれというのか？」
「…少なくも華琳さまはお前のことを信用しているし、それにお前にはそれほどの智謀があると判断している」
「…あくまで孟徳のためか……妙才の忠節、姉の元譲の計画なしな行動に比べればもっと精錬された忠義と見た」
「褒め言葉として受け取ろう」
「が、俺は孟徳の軍師になるつもりはない。彼女の軍師役を務める者は他にある」
「何？」

北郷の言葉に私は驚いた。

「それは、本当か？」
「俺は未来から来ている。この世界は俺が知っている情報を細かいところで違うものも多いが、逆に言うと基本的はことは同じだ。曹操、そして彼を支える夏侯の兄弟。そして、長い間孟徳の覇道を支える人物が居る」
「誰だ、それは……」
「じ……っ！」

その時、突然北郷はその場で足をくじけて倒れた。

「大丈夫か？」

「……。……今のは…？」

「どうしたのだ、北郷」

「……あの時と同じ感覚だ。どうやら、時の流れに直接問題を起こすような事は出来ないみたいだな」

「……」

また、私には分からない言葉をいっている。

「ほら、立てるか」

「……」

私が手を伸ばすと、北郷は無言で袴の横の懐から手をだして私の手を掴んで立ち上がった。

「咄嗟な行動が俺の生命活動に関わるようなら、迂回した道を選ぶことでそれを凌げる可能性がある」

「？」

「もし、彼女が現在この城の文官をやっていることを可能性として考える場合、曹孟徳に仕えるためにもっとも近い道を考慮すれば……いくつかの可能性を導くことが出来る」

彼はしばらく上を見て黙りこんでいたが、直ぐに私を見た。

「この城に軍師が居なければ、孟徳に案を出す前に最終的に検討するのは誰だ？」

「私だが…」

「なら、今回の戦いの準備についての資料の中で、何か特徴的なこ

とはなかったのか？」
「……いや、特には…すべて予定された通りに…いや」
まだ一つだけ、届いてない報告があった。
「軍の兵糧についての報告がまだ上がっていない」
「なら、それは誰の役割だ？」
「兵站を管理する者だ。今頃実務的な仕事に当たっているだろうから、その部署のところに行くと解るだろう」
「担当者の名は？」
「えっと…ちょっと待ってくれ……」
確か、ここに……
「荀文若…だな」
「……」
「…北郷？」
「その報告書がまだ届いてないと言ってたな。なら、俺はそれを持ってきてあげよう」
「それは構わないが…どうしたのだ？」
「とても興味深いことが起きた。それじゃあ、これで失礼する」
と言って、北郷は入ってきた時のように挨拶もなく咄嗟に部屋を出て行った。
＞ｐｆ＜
？？ＳＩＤＥ
「よし」

これで準備は万全よ。
これで、気持ち悪い男どもが通るこの兵糧庫ともさよならよ。
私は、私は自分のすべてを賭けて、華琳さまの軍師になってみせる。

「君」
「！？」

なっ！

「きゃーーーー！！！！！」
「？」

何こいつ！いきなりどこから湧いてきたのよ！

「何よ、あんた！死ね！寄るな！息するな！死ね！！」
「……初対面の人に言うような言葉ではないな」
「うるさい！何よ、あんた！男のくせに気安く人の肩を触るだなんて、妊娠したらどうするつもりよ！」
「人間、異性に触れただけで妊娠するものだったら、人はとっくに滅亡の道へ進んでいるだろう」

何言ってるのよ、こいつ。わけわからない（おまえもな　ｂｙ作者

「そんなことより、今回の軍の出立に使う兵站についての報告書をもらいに来たが、担当者は誰だ？」
「私がそうだけど、あんたは何者？何故あんたそれをもらいになどきているのよ」
「そうか、お前は荀文若か。なら話は早い。その報告書とやらを見せてもらおう」

何こいつ？男だということだけでも気持ち悪いというのに、見た目まで最悪よ！

「嫌よ！何故私があんたみたいな男に見せなければならないのよ。報告書なら後で夏侯淵将軍に私が直接だしに行くわ」

「妙才に頼まれている。……俺は間怠っこしいことは好きではない。君がどれほどの人材になれるか早く確かめたくてわくわくしているんだ。さっさとその報告書とやらを見せたてもらおう」

と言っていたあいつは、突然私を通りすぎて私が置いておいた報告書の竹簡を取った。

チャラチャラ

「ちょっと、何読んでるのよ！中継役ならさっさと持って行けば……」

「……興味深い……君は死にたいほどの馬鹿か、それとも相当な天才だ」

「は？」

何言ってるの、こいつ。

「現在の曹操軍の軍の練度、士気など…相手の賊の規模は測れないとしてこっちの実力を最大限に利用した場合、俺が計算した軍の最適兵糧量に近い」

「は？何言ってるの。あんたが私と同じ兵糧量を考えたって言うの？」

ありえないわ。これは私でも何日も賭けて計算しておいたものなの

に……。

「実際ならこれよりは少し多い方が安全在庫を確保できるが、これぐらいが君の計画には一番的確だろ」

「なっ！」

「君はこの兵糧報告書を使って、孟徳を挑発させ、自分を軍師に任命させるように策を練ったのだろ」

「！！」

こいつ、何故私の策を分かってるの？！

「興味深い、実に興味深い策だ。曹操は自分の才を信用する者を好む。君のこの自分の才への信頼感あふれる策は、たしかに孟徳の気を惹くに十分だ」

「あんた……何者？」

「…それが重要か？」

「重要も何もないわ！あなたほども者がこの軍に居たなんて聞いてないわよ！私の策をこんなに簡単にみやぶるなんて…一体誰よ！」

私が念に念を入れた策を…こんな男に見破られるなんて…認めないわ！

「俺の名前は北郷一刀。孟徳にはこの城の街の警備隊の隊長という役割を受けさせてもらっている」

「警備隊隊長ですって？」

「そうだ。そして、君には孟徳の軍師になってもらわなければならない、荀文若」

「はっ！あんたなんかに言われなくてもなってみせるわ。私のこの策を使ってね。せいぜい邪魔をしないでもらうわよ。警備隊隊長の分際で」

私から彼から報告書を奪い取って夏侯淵将軍のところへ向かった。
「その報告書はまだ未完成だ」
「！」
行く足を止める。
「私の策が、未完成ですって？」
「君の冒険心は関心するが、その兵糧ではまだ十割君が勝てる策とは言えない」
「策に絶対はないわ。あなたなんかに言われなくてもそれほどの危険は念に入れているわ」
「……だが、軍師なら常に絶対勝利の策を夢見るものではないのか？」
言ってくれるじゃない
「……じゃあ、はっきり言いましょう。この策なら必ず曹操さまは私を軍師にしてくださるわ」
「そこに異議はない」
「なら、これ以上私に話賭けないでもらえるかしら。あなたと一？の空気を吸うことも気持ち悪いから」
もうほんとにあんな奴関係無しよ。
さっさと行きましょう。
＞pf＜

「興味深い。流石は王佐の才を持った天の才、荀文若だ……ゾクゾクするね」

四話（前書き）

他の外史に比べて明らかに受けていて逆に怖い。
もうこれ残弾少ないのになーーそろそろ書かんと…

四話

華琳ＳＩＤＥ

「一刀がここにきていたの？」

「はい」

秋蘭に報告を聞きに彼女の部屋に行ったら、秋蘭は一刀がここに来ていたを言った。

「彼が何を考えているか分かるかしら？」

彼が我が軍に軍師が居ないことに疑問を持っていたことはわかる。できれば、彼に軍師になってもらいたいけれど、彼自身にそのつもりがあるとしたら最初から軍師のことを口にしなかったでしょうね。それなら

「私にもわかりませんが、ただ、北郷は我が軍の軍師になれるようなものがいると言っていました」

「それは誰なの？」

「誰かはいってませんでしたが、心当たりは…」

「言ってみなさい」

彼が軍師として勧めるような者。

どんな人かしら。

「荀？文若です」

「…荀？…」

荀家の…

がらっ

「！」

「夏侯淵将軍、兵站の報告書を持って参り……！」

変わった形の頭巾の女の子がそこに居た。

＞pf＜

「それで、説明してもらおうかしら。こんなふざけた話を持ってきた理由を……」

「はっ」

荀文若、彼女が持ってきた報告書を見て、私は驚かざるを得なかった。

報告書には、元用意すべき兵糧の量の半分しか用意出来ていなかった。

こんな食糧で軍を出立させたら途中で行き倒れになってしまう。

軍事に於いてこんな働きをされると、ただでさえも首を刎ねてしまっても文句は言えないはず。

それが態とこんな真似したとも言えば、それほどの理由がないわけがない。

「まず、このような兵糧の量を準備した理由ですが、華琳さまがこの報告書をご拝見なされば、必ずや担当する者お呼びになるでしょう」

「そう、あなたはそれを逆手にとって、態と私があなたを呼ぶようにとこんな報告書を…？」
「はい。…自分の手で華琳さまに直接捧げることになるとは思っていませんでしたが…」
「で？私の前に出て、あなたはどうするつもりだったかしら」
「もちろん、そこにある兵糧を持って出立できるようにします」
「！」

もう一度言うけど、この兵糧だと普通に行軍しても帰るところで兵糧が尽きてしまう。
もちろん万が一も戦が長引く場合を想定して多めに用意したこともあるけれど、それは軍を率いる時に当たり前に用意しなければならないもの。
それがその半分の兵糧で、無事賊の退治を終えて帰ってくることができるですって？」

「兵糧が少なくなると郵送部隊によった兵の進軍速度低下を防ぐことが出来、進軍速度が上がります。無駄な兵糧を最初から持っていかないことでより早く賊を退治することができます。これが二つ目の理由です」
「けど、兵糧が半分になったところで、軍の速度が倍になるわけではないわ」
「無論です。そこで、三つ目の理由ですが……」

・・・・
・・
・

「それで、荀文若を軍師にしたのか」
「ええ、あなたも秋蘭にそう言ったようだけれど…違ったのかしら」
「…俺の判断が既に孟徳の判断を覆すことができなくなっている。言うだけ無駄話だ」

一刀はいつもみたいに淡々を述べていたけれど、
気のせいかしら、少し不機嫌に見えるのは…。

だけど、なんと言っても今は既に軍が進軍中。彼が言ったとおり覆すことはできないし、そうするつもりもないわ。
彼女は自分の策を持ってすれば、自分が準備した兵糧だけでも十分なものだと言っていた。
もし、彼女の言う言葉が虚言であればそれぐらいの器と見て約束通りに頸を刎ねる。

「ちょっ！なんであんたがここに居るのよ」
「……また会ったな、文若」
「人の質問に答えなさいよ！何であんたがここにいるのよ！」
「……俺が孟徳と一？に居ることは契約の条件の一つだ。これからの彼女の戦いには中々興味を持っている」
「なんですって？！」

聞くと、荀？、桂花はすごい男嫌いらしい。
私にはあまり関係ないけれど、一刀との間に不和があるとなると今後少し厄介なことになるかもしれないわね。

「華琳さま、どうしてあんな男が華琳さまのお側に……」
「安心なさい、桂花」
「そうだ、文若。俺は…言わば君の補佐役ぐらいの者だ。君の軍師の座を揺らすことはない」

「そんなことは最初から思いもしていないわよ。というかあんたの脳みそ私の補佐役とは身の程知らずね」
「……」
そう言われたら、突然一刀は桂花に近づいた。
「な、何よ」
「君の策は失敗だ」
「なっ！？」
「俺が保証する。君の策は未完成だ」
「あんた、私を侮辱するつもり？！」
「事実を言ったまでだ。このままだと、君の頸が孟徳の手に落ちる日も近い」
「なんですって！？」
何だか既に険悪な雰囲気してるわね。
「一刀、桂花は挑発するのはやめてもらえるかしら」
「……」
「あんたがあの時私の策を読めたのは関心するわ。だけど私の策は完璧よ。あんたみたいな男にはそれが分からないかもしれないけど」
「なら賭けるか？」
「…！」
「もし、君の策が成功すれば、君の望む通りに孟徳の手前に出るのはやめてあげよう。ただし、失敗した時には君の真名はもらう」
「……」
「どうした、自身がなくなったのか、文若」
「…ッ！いいわ。ただし、私の策通りになった時は華琳さまから一里以上近づかないこと。いいわね！」
「……構わん」

一里（４００ｍ）って、城の中に置けなくなるじゃない。

＞ｐｆ＜

「あなた、何勝手に桂花とそんな賭けをしてくれたのかしら」

「彼女の策は失敗する。俺の計算は的確だ」

「そういう問題じゃないわ。私の許可もなくそのような賭けをするなんて……もしもあなたが負けたら…」

「その時は俺の頸を刎ねろ」

「なっ！」

何を言って…

「荀文若、かの王佐の才を持ったと評価される程度の者があの程度であるとすれば、魏の成り立ては遠い。それなら俺もこれ以上孟徳に興味を持つことが無意味というわけだ」

「……私まで試すつもり？」

「……先に俺の実力を図ろうとしたのは孟徳が先だ。俺が仕える程の戦力を持つことが出来るか俺からも試してもらう。でなければ、俺はお前に力を貸さない。その時は俺を荒野に放り出すだの首を刎ねるだのすればいい」

「……」

一刀、あなたは一体何がしたいというの？

分からないわ。

・・・

・・

・

進軍中に報告が入った。
この辺りで暴れている賊の一員と見られる群れが手前で誰かと戦っているという報告だった。
しかも、相手は…

「子供一人ですって？」
「報告に来た者たちによると、女の子一人が賊の群れに囲まれて戦っていたと……」
「華琳さま！」

春蘭は今でもあの娘を助けに行くと言わんばかりの目でこっちを見ていた。

「わかったわ。春蘭、行ってきなさい。ただに、逃げる奴らは放っておきなさい、彼らを追って賊の本拠地を見つけるわ」
「御意」
「俺も同行しよう」
「！」

一刀が…？

「貴様の助けなど要らん！」
「分かっている。ただ観察するだけだ。夏侯元譲の力を…」
「……いいでしょう。もし彼女が私が言ったことを忘れたら、あなたが奴らの本拠地を…」

「心配は要らない。さあ、元譲、早く行くぞ」
「っ、貴様に言われずとも分かっている」
そうやって春蘭と一刀は報告が入った西側へ向かった。
＞ｐｆ＜

春蘭ＳＩＤＥ

「どうして私が貴様などと一？に行動しなければならないのだ」
まったく華琳さまはいつも私を馬鹿にしすぎだ。
私が華琳さまの命令を忘れるわけがなかろうに…何故こんな奴を連れて行けと……

「自分を信用することは必要だが、元譲の場合過信しているようにも見える」
「何だと！」
「少しは身分を弁えろという話だ」
「貴様ー！」
「夏侯惇将軍！前方に賊の群れを発見しました」

ちっ！
こんな時でなければこんな奴いつでもぶっ飛ばしてやるのに……

「うわあああーーー！！」
「「！！」」

その時だった。
いきなり人が一人、私たちの上を乗り越えて地平線向こうへと消えていった。
なんだ、あれは？

「……これは中々興味深そうだ」
「お、おい、北郷！」

呆気無くしている私を置いといて、北郷は勝手に先走って前に走っていった。
大した武もない奴がでしゃばりおって…！！

・・・
・・
・

「てやあああーーー！！」
「どぅわあああああああああああ！！」

また一人賊が飛んで行った。
一体中で何が起きてるんだ？

「このー…うじゃうじゃと！」
「ひ、怯むな、お前ら！全員で一気にかかれー！」
「「「うおおおお！！」」」

中から少女の声が聞こえてくる。
一人で戦っているのならこのまま放っておくわけにはいかない

「しゃおらあああーーー！！！」

ドガーン！！

私が外側で一度剣をおもいっきり振るうと、その先にあった賊どもが両方に飛んで一直線に道が開かれた。
そして、その道の先には鉄球を持った桃色の髪の小さな少女が一人で賊どもに囲まれていた。

「怪我はないか！勇敢な少女よ！」
「は、…はい！」
「な、何だ、こいつは！」
「構わねー！両方ヤッちまえ！」
「へーーい！！」
「えいっ、邪魔だー！」

数に頼った軟弱な者共が……！！

「うせろおおおお！！！」

どガーーン！！

周りに剣を振るって、次々と賊たちを斬りかかる。
あっちの少女も同じく、鉄球を投げてかかってくる賊を一人ずつ空の向こうへと飛ばしていった。

「ひぃー！隊長、もう無理ッス！」
「ちぃっ！撤退だ！撤退しろー！」

数が少なくなった賊の群れは逃げはじめた。
「一人たりとも生きて帰すなー！」
「はい！！」
私は私が連れてきた兵士たちに号令すると一緒に、逃げていく奴らを追おうとした。
「やはり元譲、お前は馬鹿だ」
「！」
突然後ろから聞こえた声に振り向くと、私より先に行っていた北郷が立っていた。
「全員追撃を中止、何人か奴らを追っていけ。本拠地までの道を案内してくれるはずだ」
「はい！」
「貴様、何勝手なことをしているのだ！」
私は怒り満ちて北郷に怒鳴った。
が、
「戦場で命令不服従は死刑だと心得ているがこの世界では違うのか？」
「はぁ？何を言ってるのだ、貴様は。そんなことより早く追わなければあいつらが逃げてしまうであろう。何故止める！」
「……孟徳は部下のことを良く知っているな」
「何？」
「元譲、孟徳がお前に命じたのって何だ？」
「はぁ？それはあの少女をたすけて、奴らを全滅させることに決ま

ってあ……」

・

・

・

「あ」

「……孟徳が君の武を高く買うことはわかっているが、そんない武としても自分の思う通りに動いてくれないものなら時にはないよりも頼りにならない」

「う、うるさい！ちょっと忘れてただけだ！」

「…」

ところでこいつ、何やらさっき見た時より服に砂や泥がたくさんついてるが、何事だ？

＞pf＜

北郷の言う通り何人かを斥候に出して、私があの少女を保護したら、華琳さまの本隊が私たちのところまで来ていた。

「！！」

「一刀、戦闘があったって聞いたけれど……どうしてそんな汚れてるの？」

「…お前の右腕が激しく馬鹿なせいだ」

あいつ、遠回りで私のことを馬鹿と言ったな。そんな風に言ったら私が知らないとでも思ったのか？（いえ、直球です　ｂｙ作者）

「そ、そう、大変だったわね。それで、この娘は？」

お、そういえば名前を聞いていなかった。

「あ、あの……もしかしてお姉さん、国の軍隊？」

「うん？ああ、そうだが……」

「元譲、構えろ」

は？

何を言って……

「てやあーっ！」

！

ガキン！

「貴様、何をする！」

突然少女が私に鉄球を投げて来た。

「国の軍隊なんて信用できるもんか！私たちの村を助けてもくれないくせに税金ばかり持っていって……！」

何を言っているんだ、この娘は……？

ガキン！

「ぐっ、中々……」

これじゃ、本気にしないとこっちがやられるかもしれない。
しかし、相手は子供。下手して怪我させるわけにも……

「二人とも武器をおろしなさい！」

その時、華琳さまの覇気滲んだ声が私たち二人にかかった。

「「……！」」

私は華琳さまの命通りに剣をおろし、娘もしたがって鉄球を降ろしてくれた。

「あなた、名はなんというのかしら」
「え、あ…許緒といいます」
「そう…許緒、ごめんなさい」

なっ！

「…華琳さま…！」
「……！」

華琳さまが許緒という少女に頭を下げるのを見て、私も他の連中も驚いた。

「え？」
「私は曹孟徳、山向こうの陳留の街で刺史をしているわ」
「山向こうの……！！」

華琳さまの名を聞いた許緒はその場に跪いた。

「ごめんなさい。山向こうの街なら噂で聞いています。そこを治める刺史さまはとても良い人で街を良く治めてくれているって……そんな人に…私……本当にごめんなさい」

「構わないわ。あなたの言った通り、この国の官吏が腐敗していることは事実。あなたがそういう行動をとるのも無理はない」

華琳さま…なんと心の広いお方だ！

「許緒、あなたのその力、私のために使わせてもらえないかしら？」

「…え？どういうことですか？」

「孟徳、彼女を将に入れるつもりか？」

＞ｐｆ＜

桂花ＳＩＤＥ

華琳さまが頭を下げるのを見て、私も他の皆も驚いた。

そして、華琳さまが許緒に華琳さまのために力を振るうように頼んだ時、

「孟徳、彼女を将に入れるつもりか？」

あの男が口を開けた。

「彼女さえ良しとするのならね」

「……」
「何？」
「孟徳の覇道の犠牲になるには幼すぎるとは思わないのか？」
あいつが華琳さまに言う言葉は、つまり彼女が私たちの軍に入るには幼すぎるということ。
見た目でも、許緒は確かに将になって戦うにはまだ幼い。
だけど、さっきの夏侯惇との何合か交わったのを見ると、その武は将になるに足りないものではない。
「私はこの大陸の王になるわ。そのためには才があるものだったら、幼い娘だとしてもその分強ければ手に入れたい。あなたは彼女が幼いから将になれないって言いたいの？」
「…俺の話を勘違いするな、孟徳。俺は彼女が『将になるに幼い』といっているわけではない。『お前の野望の生贄にするに幼い』と言っているのだ」
「……どういう意味かしら」
「……」
「……」
何これ……
なぜか一気に場の温度が下がっていく。
華琳さまとアイツを中心にして、場の空気が一気に凍るように冷えてるように感じる。
何？一体アイツ何を考えてあんなこと言ってるの？
「あ、あの！」
そんな二人が何も言わずに互いを睨み続けている場面で、口を開けたのは許緒だった。

「もし、私が曹操さまの部下になったら、私たちの村も守ってくれるんですか？」
「……当然よ。あなたの村とも限らず、私はいつかこの大陸の民皆を守ってみせる」
「大陸の皆……じゃあ、私、華琳さまの部下になります」
「考えなおし給え、許緒。お前は今ここでも死ぬことが出来た。お前が部下にならずとも、こいつは勝手に覇王になって勝手にお前たちを守ってくれる」
「…！あなた、その口黙ってもらえないかしら」
「黙るのは孟徳お前だ」
「なんですって…！」
「貴様……！」

春蘭が我慢出来ずに剣を持ってアイツにとりかかった。が、

『一回は一回だ』
「！！」

ガチン！

夏侯惇の鳩尾を狙ったアイツの足は夏侯惇の剣によって塞がれた。が、それぐらい予想できたいたかのようにアイツが夏侯惇の剣を踏み台にし、身を投じて他の足で夏侯惇の頸を狙うと夏侯惇は対抗できずそのまま横に倒れた。

「ぐぅっ！」
「姉者！」
「待ちなさい、秋蘭！」

私は思わず秋蘭が弓を構えるのを止めた。
私は感づいていたのだ。これが私たち、家臣たちが出る場面ではないことを……。

＞ｐｆ＜

華琳ＳＩＤＥ

春蘭を倒した一刀は何もなかったかのように私の目に視線を戻した。
私も何も言わないまま彼の瞳を貫くように見つめた。

「……」
「……」

私は彼が私の覇道に益になると思って彼を拾ってきた。そして今までその考えに間違いはなかったと思っている。
だけど、今日ここで、彼は私の意志に全面的に反対した。
今までそんなことがなかったわけじゃないけれど、私の覇道に対して直接異議を唱えたわけではない。
だけど、今回の一刀はそうじゃなかった。
私が思う覇道を穢してまで、私の考えを曲げようとしている。

「……もういい」

いや。

「興味を失せた」
「！！」

彼は私を睨むのをやめて、振り向いて私たち、私の軍隊から離れていった。

「一刀！」

「……それがお前の覇道か」

「…？」

「そんな小汚いものなもう見ている。尚且つ観察する価値もない」

振り向きもせずそうつぶやいた一刀はそのまま私から離れて行った。

「うっ！待たんか、貴様！」

「追うな、春蘭！」

倒れていた春蘭が遠くなる一刀を止めようとしたけど、私はそれを止めた。

「華琳さま！あいつは華琳さまの覇道を……」

「もう良いわ」

彼が私を助けないのなら、私も彼との契約を守る義理はない。

「許緒、あなたを歓迎するわ」

「……あ、あの…」

「あなたが気にすることではない。私の真名、華琳、あなたに預けるわ」

「…あ、はい！私の真名は季衣って言います」

「そう……季衣、これから宜しくね」

「はい！」

一刀、今まで世話になったわ。
でも、私は覇王になる。
その野望にあなたが口を叩く権利はない。

・・・
・・
・

四話（後書き）

突然の異常行動はいつものことながら、結構激しいとは思ったりする……でもこの一刀ならきっと大丈夫。

五話（前書き）

曹操軍初陣の結末です。

今更ですが、この外史、実は不具合にも、書いている本人が天才じゃありません。ほんとにすいません。

五話

一刀ＳＩＤＥ

覇王、

それは全てを己の下とし、全てを喰らい尽くす強欲な指導者を称す名。

その強欲さを満たすために、どれだけ多くのものたちを犠牲にするか。

人、財、時

覇王を全盛期として全てを失っていく国の姿は偶然ではない。

謂わばここまでやらかしておいてお前が死んだらどうすんだよ、って話だ。

まるで現代いうと皆が頼っていた大企業が咄嗟の理由で倒産したのだ。

それじゃあその企業を頂点としていた群れは全てドミノのように崩れていく。

覇王はまるで自分たちの夢、望が誇り高きもので、他の者の目にとは尊い何かになるかのようにする。

確かに凡人ならそれを夢見ない。

それを夢見る者たちは周りのことなんて真に微塵なものにしか思わないキチガイな人種だけだ。

人それを天才を言う。

天にいるべき才、つまり地上には要らなかった才って話だ。

地上にお前なんて要らなかったのに何の必要も無く降りてきて、それからはまた天を目指して地上の人たちを惑わせ置いて、天に帰る時は地上は底なきの穴に落として帰りやがる、人類の進化において見た目は得だが、実際には居ない方が良かった人種だ。

「ここだな」

許緒が居た場所、そこから一番近い村あるはずの場所にたどり着いた。

「…うん？」

そこには女の子一人が村の入り口にて何かを待っているかのようにうろうろしていた。

「少し良いか」

俺はその娘に声をかけた。

「あ、はい、なんですか？」

「この村に、許緒という娘が居るか」

その娘はびっくりした顔で私を見た。

「季衣のことを知っているんですか！？」

恐らく許緒の真名らしき名を言っている。

つまりこの娘は許緒の姉妹か、それとも同じ村で育った幼なじみという話だ。

「東の荒野で彼女が盗賊と戦っている場を見た。この村の娘で間違いないか？」

「はい！季衣は無事ですか？」

「……今曹操軍に助けられて、一緒にいる」

「曹操さん……陳留の刺史の曹操さんですか？」

「そうだ。この地域の刺史が逃げたらしいからその補足に来ている。君の友たちは大丈夫だ」

「そうですか、ふぅ…よかった」

あくまで、俺が見た時大丈夫だったという話だが……

「許緒とは姉妹か？それとも……」

「一緒にこの村で育った友たちです」

「なるほど…良かったら名前を教えてもらえるか？」

「あ、はい、私は、典韋って言います」

「……」

これは、また興味深いな。

＞pf＜

華琳ＳＩＤＥ

一刀が軍を去った。
一時的なことなのか、本当に去ってしまったのかは分からないけれど、私に言い出した言葉が気にかかる。

「華琳さま！私のあいつを追わせてください！」
「……追って何をするの」

春蘭が怒りを抑えられず一刀を探すと私に申し出てきた

「華琳さまに果たした無礼、その場で償わせます！」

と言っても、春蘭を行かせるわけにはいかない。一刀のことが心配だからでなく、もうすぐ戦場を前にしてそんな暢気なことをしていられないからだ。

「ダメよ。彼の足で出ていったんだもの。放っておきなさい」
「しかしっ…！」
「くどいわよ！」
「っ！」
「春蘭、いまあなたのその怒りは彼が私を侮辱したからなの？それ

とも、あなた自身の武が穢されたからなの？」
「そ、そんなこと聞くまでもありません！！」
「なら、これ以上その話はやめなさい。私は侮辱されたとも思ってないし、彼を殺そうとも思っていない」
「なっ……！」

彼はいつも冷静な対応をする。
ちょっと変人だし、奇人ではあるけれど、その行動はいつも冷静で、理想的で、論理的だ。
そんな彼がただの感情の赴くまま私の前から去ったとは思えない。

「華琳さま、季衣と先行した部隊が賊が篭ってる砦を発見しました」
「……」
「華琳さま？」
「……」

いけないわね。いまは賊の退治の方を考えなければ……

「ええ、それで桂花、策は？」
「はい、先ず華琳さまは少数の軍を率い砦の正面に展開してください、春蘭、秋蘭は残りの連れ後方の崖に待機。本隊で銅鑼を鳴らしたら、砦の賊は目の前の華琳さまの兵の少なさに釣られ、必ずや砦から出てくるでしょう」
「待て！それなら華琳さまのことをお取りにするというだろ！」
「敵が挑発に乗らない場合は？」

春蘭が私を囮にすることに異議を言っていたが、私は構わず桂花の策を聞いた。

「その場合は、砦の内側から攻めます。この地域の図を既に把握し

ております。あの城の内側の地図も持っていますので、もし相手が策に乗らない場合でも問題ありません。どの策にしても、兵の被害を最小限に抑えることができるでしょう」
「なるほど……わかったわ」
「華琳さまっ！」
「何春蘭、さっきからうるさいわ」
「しかし、こいつは華琳さまのことを囮にすると言っているのです！」
「これだけ勝つ理由のある戦いよ。囮の一つぐらいもできなければ、今後覇道を唱えることなんてできたもんじゃないわ」
「なら、せめて季衣に護衛をさせてください！」
春蘭はさっき拾った季衣のことを護衛にさせたいと言う。だけど
「季衣の力は我が軍の戦力に重要な力となる。本名である伏兵の戦力を下がらせたくないわ。季衣はあなたと一緒に居させなさい」
「しかし、もしもの時があれば…」
「私があんな志もなくただ力を使うことしか知らない獣どもに遅れをとるほど弱いと言いたいの、春蘭」
「そのようなことは……！」
「なら決まりね」
春蘭の言う通りに、季衣に護衛をさせてもよかったのだけれど、春蘭はさきほどの醜態もある。何かまた無茶な真似をするか不安になる。
秋蘭と、子供の季衣がいれば、ある程度は謹んでくれるでしょう。
「では、桂花、あなたは私と一緒に…」
「はい」

一刀は無くても、私たちの策はつづく。
一刀、何をしようとしているのか知らないけれど、私の期待に応えられないほどなら、あなたにもう用はない。
……それでも、あなたがこれほどじゃないことは、私が一番良く知っている。

＞pf＜

桂花ＳＩＤＥ

ガーン！ガーン！ガーン！！

・・・・ギギギィーーー

「……桂花、これもあなたの想定内なの？」
「いえ、さすがにここまでは……」

季衣の情報の通り、盗賊の本隊が篭ってる砦に着いた私は、華琳さまと私の部隊を囮になって、後ろに引きずって狭い道で奇襲するという策を立てた。
それで、砦の盗賊たちを誘引するために銅鑼を鳴らしたのだけど……

「まさか、私たちの銅鑼の音を出撃の信号を勘違いして出てくるとは……」

華琳さまも呆れた顔で前を見ていた。
だけど、だからってどうということはない。

「まぁ、いいわ。このまま作戦通りに行きましょう。総員敵に適当に相手しながら後方に後退する！」

・・・・

・・

・

作戦通りに、本隊の春蘭と季衣の部隊が砦から出てきた賊の軍勢を包囲、作戦はうまくいった。
これで、華琳さまに私の智謀を証明することができた。

『君の策は未完成だ』

「ふん！何が未完成よ。戦に恐れて逃げ出すようなやつが……」

所詮男はそんな連中だ。
頭を使える奴なんていない。
今どこに居るか、知ったことじゃないけど、結果的に約束通りにあいつが消えてくれたわけだから問題はないわ。

「報告！」

その時、異変が起きた。

「何事よ！」
「賊の一部が包囲網から抜け出し、本隊がある方に近づいています！」
「なっ！」

どういうこと、どうして……包囲網が

「抜けた場所は」
「右翼の方です！」

春蘭……あいつまさか、目の前の敵に目をトラれて統率に手を抜いていたの？
何やってるのよ！
このままだと華琳さまが……！

「季衣の部隊を護衛に向かうように伝達しなさい！！私も直ぐに行くわ！」
「はっ！」

季衣はまだ軍を動かすのがうまくない。
伝達しろと言っても、間に合わない可能性が…というか多分間に合わない。
華琳さま、どうかご無事で……

＞ｐｆ＜

華琳ＳＩＤＥ

突然よそから賊の部隊が現れた。
包囲網に穴ができたのか、それとも他のところから戻ってくる部隊があったのかはわからないけど、賊の群れにしては手強い部隊だった。
賊の中でも、結構腕の立つやつがあったのかしら。

「せいっ！」
「ぐぁっ！」

だけど、だからって危ないということはない。
全てが作戦通りに行くのであったら、実戦も将棋盤の上と変わらない。
こういう時に的確な反応をしてこそ、本当の強さを図れる。

「あの女が大将だー！！」
「ちっ、うじゃうじゃと……」

「てやあああっ！」

ドーン！！

「ぐあああーー！！」
「……へっ？」

目の前にかかってくる賊に向かって立っていた私は突然太鼓のようなものが飛んできて賊たちを飛ばすのを見て思わず変な声を漏らした。

「お助けに来ました！曹操さまですよね！」

そして、後ろから季衣ぐらいの女の子一人が現れた。
薄緑の髪に青いリボンを付けて、季衣のように布が少なめな服を来た健気そうな女の子。
その子が持っている紐を引っ張ると、飛んできた太鼓が彼女の手に届いた。

「あなたは誰？」
「申し遅れました。私は季衣の友たちで、名前は典韋と言います」
「季衣の？！」
「はい、同じ村に住む友たちです」
「…どうしてここが解って……」
「白い服を来た方が、ここに来るように言ってくれました」
「！！」

一刀……！

「彼は今どこに居るの？」
「他にするべきことがあるって……さっきまであそこの丘に私と一緒に居ましたけど、私に本隊のある場所を教えて直ぐに他のところに行ってしまいました」

一刀……こうなることを読んでいたというの？
作戦にもなかったこの異常事態に、戦場の者よりも早く対処できたというの？

「…わかったわ、典韋。あなたの協力に感謝するわ。ありがとう」
「いいえ、私こそ、季衣のことを助けてくださって、本当にありがとうございます」

「そう……季衣ももうすぐここに来るはずよ。今は先ず、この賊たちを片付けるわ」
「はい！」
そうやって典韋を護衛にして、私の本隊は賊の群れと戦いを続けた。
＞ｐｆ＜
秋蘭ＳＩＤＥ
思わぬ事故もあったものの、結果は大勝利。
突然の攻撃を受けた華琳さまの本隊も、典韋の登場によってほぼ無傷で場を凌ぎ、私たちは桂花の言ったとおりほぼ被害なしで勝つことが出来た。
が、
「季衣のバカーー！何勝手に危ないところに行くのよ！」
ドーン！！
「馬鹿って何よ！ボクは村の皆を守ろうと思ってやったのにー！」
ドーン！！
「だからって、私に何も言わないで出ていくなんて聞いてないよ！」
ドーン！！

「直ぐに戻ってくるからそんなの一々言わなくてもいいじゃない！」

ドーン！

「何が直ぐ戻ってくるよ！危険な目にあってたくせに！」

ドーン！！

「流琉は私の気持ちもしらないでどうしてボクばかり悪いっていうんだよ！悪いのは逃げた官軍のあいつらなのにー！」

なんか、かなり規模の大きい子供喧嘩が始まっていた。

「貴様、華琳さまを危険な目に合わせないといっていたな！なのになんだこれは！」

「あんたが馬鹿みたいに突撃したせいで華琳さまが危険な目にあったのでしょ！」

こっちはこっちで大人同士の喧嘩が始まっていた。

はぁ……

「華琳さま、やっぱこんな軍師なんて我が軍に必要ありません！」

「華琳さま、こんなイノシシ武将、今後の曹操軍に邪魔にしかなりません」

「なんだとー！」

「何よー！」

「……＞＞ピキッ＜＜」

あ

「春蘭」
「はっ！」
「一ヶ月閨立ち入り禁止」
「＞＞ガガーン＜＜」
あ、姉者の口から白い何かが……

「桂花」
「は、はっ」
「帰ったら私の部屋に来なさい」
「は、はいっ！」

そして桂花の後方に光とともに花びらが舞い散る。

「秋蘭」
「はっ」
「部隊を分けて、周りで北郷が居るか探索なさい。遠くは行かなかったはずよ」
「北郷を、ですか？」
「典韋をここに連れてきたこともあるし、何か企んでいるわ。探しだしなさい」
「…御意」

北郷、あの時行ってしまうかと思ったら、まだ何かかんがえての行動だったというのか？
そして、華琳さまも内心彼のことをずっと気にしていらっしゃった。
私には二人の考えていることに追いつくことができない。

・・・

・・

・

＞ｐｆ＜

一刀ＳＩＤＥ

バサッ

「昼間荒野を歩くのは熱いな……甘いものが食べたくなる」

バサッ、バサッ

「観察は済んだ。孟徳と荀？の臨機応変の用兵、許緒と悪来典韋武勇、妙才は元譲の押さえ役にまわなければ元譲の力を戦場で１００％発揮させることは難しそうだな。今回は俺が元譲を挑発させたせいもあるが、それを念にいれておくとしても今回の痴態は曹魏の今後に悪影響になることは否定できない」

バサッ

「後は、俺と荀？との賭けだな。先ず、元彼女が負ける要素を幾つか述べよう」

＞ｐｆ＜

桂花ＳＩＤＥ

「これを、あいつが？」
「はい、進軍がある程度進んだら、これをねこみみの帽子をした軍師さまに伝えろと……」
退軍を始め3日後、流琉は私に一通の手紙を渡した。
あの男が渡した手紙と言いながら、
探索に行った秋蘭まだ見つかってないようだし、見る必要もないと思ったけど、流琉のこともあって、一応封を開けた。
『君と俺の賭けは、孟徳とお前の賭けに反するものがある。俺が勝つとお前は孟徳に負け、お前が勝つとお前が知らない俺と孟徳との賭けによって俺が死ぬ。その中、俺は曹魏に最善になる方法を想定した。そして、君との賭けに俺が負けてあげることにした』
「何を言っているの、こいつ……」
負けてあげる。あなたはただ逃げただけでしょ？
『先ず、君の策が失敗する理由を幾つか述べよう。一つは夏侯惇の存在だ。曹操軍の一番古参として一番頭の固い元譲が、君の（俺が想定している策通りに行動することを前提にして）策にまんまと動いてくれそうにないということだ。これが、君の策が未完成だと言った理由だ』
確かに、アイツの言う通りに、戦場にて春蘭のせいで小さな事故が起きた。
だけど、それほどの異変はなくてはならないものだけど、必ずないというものではない。
このような想定外の状況が私の策の穴になるとは言えない。

『そして、君が孟徳との賭けに負ける理由は、君が自分のことを過小評価したことにも問題がある』

「なっ！」

『君は最善の策を用意したくせに、兵糧の量を最悪の場面を想定して用意した。自分の策に自身があるなら、行った時と同じ数の兵士が食べれるような兵糧を用意すべきだったのにもかかわらず、君は帰ってくる時兵士が減ることを想定した。それが君が孟徳に負けかねない理由になる」

「……」

確かに、私の策は成功した。それも大成功。

でも、そのせいで私が想定した兵士の数を上回る数が残ってしまい、兵糧に関しての賭けであった華琳さまとの賭けで不利な位置に立った。

でも、もっと問題になるのは兵士の数ではなく、

『そして、決定的にお前が孟徳に負けそうになった原因は……』

「季衣」『許緒だ』

季衣は小柄なのに比べて、使う力もあったのか、他の人の何十人分の食事をいっきに片付けた。

このままだと、私の計算でもギリギリの所で兵糧が尽きてしまう

『以上の問題は想定できるものも、できないものもあったが、結果

的にお前が許緒を登用としようとする孟徳を止めなかった時点で、俺はお前の負けを確信した』

「だけど、季衣はいい戦力となった。例え私が賭けに負けることがあってでも、その場で季衣をあんたのような理由で入れることを反対することなんて、できるはずがない」

『が、君にはそういうことを言うほどの鉄面をしていないから、俺はお前を勝たせるためにある人を探した。それが、』

「……」

「？」

私は目の前で私が手紙を呼んでいる姿を見ている流琉を見た。

『聞くに典韋は、昔から許緒と一緒に居たらしい。それに料理の腕もあって、良く許緒に料理を作ってやったりもしたそうだ。彼女に事情を説明して、許緒の食する量を抑えてもらえ。そしたらギリギリのところまで持ちこたえることができよう。むしろぴったりの兵糧になると、孟徳の評価も上がる』

「……冗談じゃないわ」

『解決案は提示した。俺の計算では、お前がこれを読んでいる時点で行動に入らなければ間に合わないだろう。どの道、俺はお前との賭けの通りお前と孟徳の前から去る。戦場でのお前たちの指揮と武勇は見せてもらった。いい資料になる。せいぜい孟徳の覇道のために力を振り絞るがいい。尚、俺が居た部屋に行ったら俺が書いた軍の改善案がある。元譲の邪魔で終わらせては居ないが、お前なら実行可能なものに出来るだろう。話は以上だ』

手紙は、そこで終わりだった。

負けた。

私の完敗だ。

彼は私に自分をなんと紹介していた？…警備隊隊長？

どうして？どうして彼ほどの人材が華琳さまのそばに既に居たのに、彼は華琳さまの軍師にならなかった。

なぜ『私なんか』を華琳さまの軍師にさせるためにここまですることが出来る？

「……＞＞ボタっ＜＜」

「…桂花さま？」

あまりの情けなさに涙が滲みでて手紙を濡らした。

＞ｐｆ＜

秋蘭ＳＩＤＥ

「それで、君は典韋を探すために華琳さまにあんなことを言ってその前から去ったというのか？」
「……座って負け仕合を見ているのは性に合わないのでな」

荒野のあるところに倒れていた北郷見つけて保護したら、北郷はそんなことを述べた。
つまり桂花を華琳さまの軍師にさせるために、こいつは華琳さまの前で華琳さまのことを侮辱までもしたということだ。

「華琳さまがそんな賭けで負けたぐらいで本当に桂花を斬るとでも思っていたのか？」
「お前はそうでないと確信出来るかも知れない。だが、決定をするのは孟徳自身。人に任せることよりは自分で掴めた勝利の味の方が良い」
「…つまり、お前の勝利だと」
「勝ったのは荀？」

だが、勝たせたのは北郷、お前だ。
我が主華琳さままでも利用して、
季衣のあるかも知れない友たちまで巻き込んでまで、お前は自分が思うように私たちの軍を導かせた。
なんと恐ろしい奴だ。

「が、妙才」
「うん？」
「俺があの時孟徳に言った言葉は、ただ荀？を助けるためにそんなムダ話を言ってその場を去ったわけではない。俺は本気でそう思って孟徳にそう言ったのだ」

「……」
「許緒、あの子が見た目で何才もすると思う。１２，１３？お前や元譲や荀？は孟徳の覇道のためなら命でも賭けることが出来るだろう。でもあの娘はそれできるか？いや、出来るとして、お前たちはあの子にそんなことをさせるつもりか？主の尊い望のために？」
「…それは……」

季衣に、そして典韋。
二人ともまだまだ子供だ。
華琳さまはいつか覇王になる。
その望こそは高い所を見るものの、そこまで行く道は厳しい。
力のあるものは誰でも拒まない華琳さまだが、彼女たちは単に自分たちを村を守りたいから戦場に出ていただけだ。今は賊退治という名分があるが、これからはそうも行かない。ただ勝つために戦いが、理想と理想とのぶつかり合いが始まると、私たちはあの子たちにちゃんと私たちの戦う理由を説明することができるか？あの娘たちの犠牲を願えるか？それで掴まえた覇道は、華琳さまが思っているほど誇り高きものになれるのか？」

「わからない」
「……そうか」

肯定することも、否定することも私にはできなかった。

「なら、やはり俺は戻らなくてはいけないわけだ」
「？」
「妙才、元譲、孟徳の志を支えるも、その先を共に見ることはできない。だからお前は俺の問いに何の迷いもなく肯定できないのだ」
「！！」
「覇王は孤独だ。配下の将も、軍師も兵士もただの駒だ。駒は象棋

盤の上で自分たちを操っている棋士の心を知ることができない。ただ動かせるように従ったまま動くだけ。どれだけ棋士のことを理解しているつもりでも、それは駒として、自分がどうすれば良いかを知っているぐらいだ。駒ではなく、象棋を打っている彼女の側に居てもらわなければ、彼女は一人で戦っているのも同じ」

「…お前は、それが出来るというのか？」

「……この天下で唯一お前の主と同位に立つことが出来る者があるとしたら…それは俺だ」

北郷は淡々と私の目を見てそう言った。

「だから、お前次第が妙才。俺を孟徳の仲間にしたいのなら馬一頭を渡してこのまま孟徳の居る場所へ戻れ。俺を孟徳の敵になりかねない危険な人物だと判断するならこの場で俺を斬れ」

自分の生死について語っている口のことがまったくくだらない話を言っているかのように、北郷の目はビクッともせずに私を見ていた。それはまるで興味がないかの目つきだった。

私に、自分の命に、この世界に何の未練も、興味もないかの目で、彼は私を見ていた。

この男が天才ということは分かった。

その智謀、判断、奇才なれど的確で、有効なのも分かった。

だけど、こんな目をする者が、華琳さまをどうこうできるわけがない。

こんなものが、華琳さまと同じ位置に立てるはずがない。

華琳さまの行く道を邪魔できるわけがない。

「馬を渡そう」

・・・
・・
・

＞pf＜

桂花ＳＩＤＥ

「そう、一刀がこれを書いたですって？」
「はい」

私はあいつの手紙を華琳さまに見せた。

そして、華琳さまにこの頸を斬ってもらいたいと思った

私では華琳さまの軍師にはなれなかった。

アイツは…北郷は私の能力を遙かに上回っていた。

そんな奴を抜けだして、私なんかが華琳さまの軍師を務めるなんてとんでもないと思った。

華琳さまは私をどうなさるつもりだろうか。
覚悟はできていた。
私の手で華琳さまの覇道を導きたいと思っていた。
でも、例えそれが私の力でないとしても、華琳さまの天下が成すとすれば、私はそれでもいい。

「……＞＞ぶるぶる＜＜」

華琳さまの手紙を持っている手が震えていた。
いや、華琳さまの全身が震えていた。

「ゾクゾクするわね」
「はい？」

私は顔を上げて華琳さまの顔を見た。
華琳さまの顔は笑っていらっしゃった。

「一刀、あなたって本当に興味深いわ。是非とも欲しい」

そして、華琳さまは私を見て言った。

「桂花」
「はい」
「あなたを正式に私の軍師として仕えるわ」
「……はい？」

『絶』が落とされると思っていた私は心外の言葉に間抜けな声を出してしまった。

「し、しかし、華琳さま、私は……」

「今回見たあなたの智謀、綿密さ、そして、アイツの保証もあるわ。あなたを軍師にしない手はない」
「……！」
「桂花、私がなぜ一刀を軍師しなかったか分かってる？」
「…いえ、わかりません」
「…アイツと私はね……

・・・
・・
・

＞pf＜

華琳ＳＩＤＥ

三日後、

城を半日距離にしていた朝。兵糧が尽きてしまった。
もう賭けなんてどうでも良くなっていたから別にいいけれど……

「華琳さま」
「秋蘭？どうしたの？」

先鋒に居た秋蘭が私のところに来たのを見て、私はキョトンとして聞いた。

「それが……前方にて陳留からの輸送部隊が……」
「…は？」

・・・

・・

・

「どう計算をしても、一食分が足りなかったので、先に陳留に戻って集めてきた」
「「「「……」」」」

勝手に私たちの前で消え去っていた一刀が、今度は勝手に先に陳留に戻って一食分の兵糧を詰めて私たちの軍を迎えにきたのだった。

「貴様、良くもその面で戻ってきたなー！」

春蘭がうるさいのはきっとお腹が減っているからね。
食べたら静かになるでしょう。

「一刀」
「異論は認める。勝手に輸送隊を組んできた。相当な罰があるだろう」
「違うわよ」
「……お前の前から突然消えた理由は既に典韋から荀？にわたって説明されているはず……」
「違うって言ってるでしょ？」
「……まさか、荀？を軍師にしないという話ではないだろうな」

「はぁ……」
「……？」

この男、自分のことに対しては鈍いのね。

「…おかえりなさい、一刀」
「……興味深いことを言うね、孟徳」
「華琳よ。あなたが負けたから私のことは真名で呼びなさい」
「……」
「後、そうね。あなたもとても興味深いことしてくれたわね、一刀」
「……通常の働きだ」
「そう、今後も頼んだわよ」
「……孟徳こそな」

『『私（俺）の興味に応えてみなさい（もらおう）』』

五話（後書き）

何気に一刀が桂花に気を使ってくれているのがお分かり頂けただろうか。

期待されてるんですよ、桂花。

幕間1（前書き）

幕間という名の拠点です。

幕間1

拠点：華琳　　砂糖で出来た男

コンコン

「一刀、入るわよ」

がらっ

「ぶっ！」

私が門を開けた途端、白い粉たちが私を出迎えた。

「けほ！けほ！一刀？！」

「……」

返事がない。

この白い粉は何？チョークの？一体どれだけ換気してないとこうなるのよ。

「一刀、居ないの？」

「……」

暫くして、白い粉末が外に出てきて、内側の方が見えてくるようになると、そこには……

倒れている一刀が居た。

「一刀！？」

私は驚いて倒れている彼の方に言った。

「一刀？生きてるの？しっかりなさい」

「……ぁ…い」

「何？」

「……た…ぃ…」

「え？」

何？

「……甘いモノが食べたい……」

取り敢えず一発殴らせなさい。

・・・

・・

・

一刀の部屋は一刀の要望によって改造されて、窓もなく、外からの光もろくに入らない上に換気性も悪い。

その上、彼自身が他の者に邪魔されたくないということで、周りは普段人も通らないし、侍女たちも彼の部屋には行かないことになっている。

「いつから何も食べてないのよ」
「……１９５時間２４分３秒から記憶がない」
８日以上何も食べてないですって……
「よく生きていたわね」
「…即死寸前だった。孟徳が来てなかったら死んでいた」
「華琳って言いなさいとなんと言ったら分かるのよ」
タッ
私は換気されてもまだ白い粉末が残ってる机の上に皿を置いた。
「…これは？」
「砂糖水よ、取り敢えず糖分だけ摂取しておきなさい。そんな体じゃ何も食べられないでしょ」
「……どこのバ〇だ」
「は？」
相変わらず何をいうのだか……
「そもそも一日三食は摂らずとも、おやつだけは食べるんじゃなかったの？」
むしろあなたは甘いものの方が主食でしょ？
「お前の新しい軍師が俺のスイーツに入る予算を全部削減しやがった。恩知らずめ」
「あぁ…そういえば桂花に予算の最終確認を任せていたわね」

あの娘そんなことしたの？
確かに一刀の甘食に当たる予算は結構痛いところはあるけど、それは一刀が城内運営において節約できた金に比べたらそれほどのものじゃないから放っておいたつもりだったんだけど…

「……＞＞ギロリ＜＜」
「そんな目で私を見ないで頂戴。私も知らなかったのよ。っていうかそんなことがあったなら、あなたが行ったらいいじゃない」
「俺はあいつとの賭けに負けたせいでお前お前及びあいつの近くにいけないようになっている」
「いや、なんで守ってるのよ」

あれはあなたが桂花を私の軍師にさせるために態とやったのでしょう？

「あなたが桂花に行ったって、あんな事実上負けた喧嘩で文句を言うほど桂花は鉄面皮じゃないわよ」
「……」

無言のまま砂糖水を飲む一刀を後にして、私は周りの光景を見まわった。

相変わらず訳のわからない記号らが黒版に書かれている。
これって他の人が見ると一体何をしているのかさっぱりだわ。

「それで、孟徳はどんな用件でここに来たんだ？」
「華琳。別に用はないわ。最近あなたが廊下を歩く姿が不気味だという陳情書が上がってこないからおかしいと思って見にきただけよ」

事実、一刀が目の下に大きなクマを作って腰を曲げて手を袋に突っ込んで廊下を歩いていると、通りすがってる人たちが怯えるそうだ。まるで幽霊に取り憑かれているみたいだどか、死神のようだとか。この前の御前会議では結構長い間頑張ってくれた老文官が、彼を追い出さないと自分が出ていくと騒いだ。
結果的には追い出したけど
こいつは私が自分のせいでどれほど苦労しているのか分かってるつもりなのかしら。

「今回は何を企んでいるの？」
「……街の改善案だ」
「まだなの？この前に上がってきたものを見て素晴らしいと思っていたのだけれど」
「…あおれは実現不可能と判断した」
「どうして？」
「……現在の役人では量も質も足りない」
「そう……」

季衣と流琉が加わってはいるけど、うちのところはまだまだ人手が足りない。
街の治安に関しては、一刀に一任しているのだけど、一刀は自分の目に叶う副将級のものを見つけていないらしい。

「何なら流琉をあなたのところに回してあげようかしら」
「愚かなことをいうな、孟徳。そんな人事ができないということは、お前も俺もわかっている」
「華琳って言いなさい。あと、それほど無理なことも言っていないじゃない。事実、あなたはこうして昼夜を問わずに働いた挙句倒れるぐらいに仕事が大変なのだったら、あなたの健康のためにもあなたに将もう一人ぐらい回してあげるわよ。親衛隊は季衣だけでも足

りるから」
「かの二人は元譲と妙才のように二人で一人のようなもの。離れていては己の１００％の力を出せない。以前の賊との戦いで元譲が暴走して戦線を見だした挙句、孟徳を困らせたことを鑑みると、あの二人を違う部署に所属させることは後々よろしくない」
「華琳って言いなさいって言ってるでしょ？…別に完全に変えるというわけじゃないわ。あなたが早く他に使えそうな者を選んでくれればいいだけの話じゃない」
「……」

一刀は少し黙り込んだ。
今頃頭の中で、流琉を臨時的に自分の副将にして、次の役人を探すまでどれぐらいかかって、またそれが私の軍にどんな影響を与えるだろうか慎重に計算しているのでしょうね。

「……これはまだないのか？」

暫くして燃料が切れたのか彼は私に向かって空になった杯を見せながら言う。

「私を水の給仕に使うつもり？」
「それほどの暇はあると見た」
「この城の君主の私が暇ですって？」
「俺より暇でなければ、どうやってここまで来る時間が出来る」
「押して作ってるのよ、馬鹿」
「その親切さに訴えて…」
「……まったく」

私はため息をつきながら外へ向かった。

・・・・
・・
・

「孟徳」
「華琳よ」
「……何だ、これは」
「何って、砂糖水じゃない。……樽に入れた」
「……俺は〇キじゃないぞ」

関係ないけれど、結局全部飲んだ

＞pf＜

拠点：流琉　兄様が美味しく頂かれるために……

「兄様のお手伝いをですか？」

親衛隊の訓練をしているうちに、華琳さまが訪れて私に兄様のお手伝いをしてほしいとおっしゃいました。
兄様というのは北郷一刀さんのことです。初めて会った時は初面でなんと呼べばいいかよく分からなかったのですが、後で季衣に会って一緒に陳留に来る際に、兄様に出会ってその時正式に挨拶しました。
あ、後、街に一度戻って、街の長老さんたちに報告する時にも一緒に来てくださって長老さんたちを説得してくれてすごく助かりました。

「ええ、やっと親衛隊隊長として慣れたところに申し訳ないのだけれど、このままだと一刀がそのうち死にかねないから」
「死！？」
最近会ってないと思ったんですけど、いったい何が……
「そういうわけで、あなたさえ良ければ、一刀を引っ張り出して明日からでも彼の手伝いなどなど関わって欲しいわ。お手伝いと言っても、彼は一人で置くと外にも出ずに餓死するまで内側で黒版の相手してるから、あなたが力づくでももっと健康的な生活送るようにしてほしいのよ」
「……はい、分かりました！」
実際、私が考える時間はそれほど長く持ちませんでした。
・・・
・・
・
コンコン
「兄様」
「……」
返事がありません。

『このままだと一刀がそのうち死にかねないから』

まさか！

「兄様！」

ガターーン！

閉まってる門を無理やりこじ開けて白い粉末が蔓延するその部屋に入りました。

「兄様！」

「……うぅ…」

兄様は布団（というよりは床に布団を敷いただけの）

「！！」

い、

「典韋か…？何をｓ」

「いやあああああああああああああああ！！！！！！！

ドーーーーーーーーン！！！！

・・・

・・

・

「ごめんなさい！」
「……やってくれたな」

私が暴れたせいで酷い様になった部屋の中で私は跪いたまま頭を下げて謝罪しました。
部屋の壁を飾っていた黒版たちがあっちこっち半壊しています。

「これを新調してもらうと、また荀？に酷い言われをされそうだ」
「本当にごめんなさい！」

だって兄様がわるいんです！何で上半身裸で寝てるんですか！？

「床が冷たくて寝心地がいいからつい……」
「ついじゃないです！／／／／／／／／大体、なんでこんな時間に寝ているんですか。もう真昼間なんですよ？」
「朝日を見て眠りに着いた」
「何故夜には寝なかったのですか」
「眠くなかったからだ」
「……昨日はいつ起きたのですか？」
「日が暮れる頃だった」

ダメです。この人。
完全にダメダメです。
生活が完全に逆になってます。

「というわけだから、俺は寝る」
「いや、寝ないでください！」

また床に寝付こうとする兄様の布団を奪い取りました。
一瞬、しまったと思いましたが下の方はちゃんと着ていました。よかったです。

「人は十分な睡眠を取らなければいけない」
「人は昼生活して夜寝ないといけないと思います！」
「……」

華琳さまが私に任せたことがなんなのか分かりました。
このままだと、兄様が体を壊すかもしれません。

「…兄様、このままだと兄様の健康によくないです。取り敢えず、外に出て日光を浴びましょう」
「……」

上半身を起こしたまま寝てます、この人。

「甘いもの作ってあげますから」

タッ

「ひゃっ！いきなり起きないでください！」
「典韋の料理には興味がある。是非ともまた食べてみたいところだ」
さっきまで眠くて光を失っていた兄様の瞳が輝いています。
やっぱちょっとおかしな人です。

＞pf＜

初めて兄様に会った時、兄様は季衣について話をしてくれました。
でも、私の名前を聞いて

「興味深い」

とつぶやいた途端、いきなりその場に倒れました。

「だ、大丈夫ですか！？」
「……そろそろ限界だ」

最初はどこか怪我でもしているのかと驚いて近くに行ったのですが、
その時……

ぐぅ〜〜

「……あ、あの」
「……」

当時兄様が上がってきた街への道はかなり厳峻な地形で普段行かない人ならすごく疲れるようなそういう道でした。

・・・
・・
・

「おばさん、ちょっと厨房お借りしてもよろしいでしょうか」

「あら、典韋ちゃん、…その人は…」
「えっと、山を倒れていた人です。取り敢えず、砂糖水でも一杯飲ませてあげてください」
私は村に居るある飯店に兄様を負って行って、女将さんに断って厨房を使って頂きました。
見た目兄様は、厳しい道程を短時間で動いたせいで脱力していました。
何かすぐに力を出せるようなものをつくろうと、私は湯圓を作って兄様の前に出しました。
（※湯圓：湯入りの団子、餡は甘いのだけじゃなく肉などと色々。詳しくはＧＧＲ）
「はい、食べてください」
「……」
蓮華を取って湯圓を口に入れたら、一瞬兄様の目が変わりました。
「……これは君が作ったのか」
「あ、はい」
「おいしいでしょ？典韋ちゃんはね、この村で一番料理の腕が立つんだから、いつかいいお嫁さんになるわよ、典韋ちゃんは」
横にいた店の女将さんがそう言って私はびっくりして振り向きました。
「もうおばさん、そういう話は…」
「確かにこれほどの興味深い料理を作れるものはそうは居ないな」
「でしょ？」
「もう、二人ともからかわないでください」

「これぐらいの料理なら毎日食べたいぐらいだ」

……へ？

「……あの、それって」

「…最初は許緒を引き返すことだけを考えようとしていたが、これほど腕の立つものをここでおさらばにするのも個人的に惜しいな……ちょっと修正した方が良いか」

「あの、北郷さん」

「典韋」

「は、はい！」

「おかわりはないか？」

・・・

・・

・

「おかわり」

「はい」

季衣ちゃんの場合、私の料理を美味しく食べてくれますけど、ちょっと早く食べてしまうところがあります。

もちろん、味も構わず食べてるわけじゃないことはわかってます。

季衣はああ見えてすごく美食家ですから。

でも、作る側としては、やっぱりもうちょっと味わいながら食べてほしいな、とは思うところもあります。

あの時、私の料理を食べてくれた兄様の顔が、疲れているものからどんどん明るくなっていくのを見て、私はそれをすごく嬉しく感じちゃいました。

「……」

「どうですか？この前は材料考えずちょっと大雑把に作ってましたけど、今回は結構念入れて作ってるんですけど…」

「……そうだな。俺としてはもうちょっと甘いのが好みだが、一般論で言うと一級料理師でもこれほどの料理を作れるものはそう居ないだろう」

「…兄様の観点では、あまり美味しくなかったのですか？」

おいしいと言ってくれると思って期待してたのに……

「俺の好みに合わせた料理なんて作っていたら、他人が食べれるようなものじゃなくなるからな」

「でも、今回は兄様だけのために作ったのですから……あ」

「？」

「いえ、なんでもありません！」

今一瞬ものすごく大胆なことを言ってました、私！

「じゃあ、あの、あの時のと比べては、どうですか？」

「……」

器を口にしながら、兄様はすごく難しそうな顔をしました。

「……正直に」

「はい」

「あの時の方が美味しかった」

ガーン

「そ、そうですか>>しゅん<<」

あの時の私さん、もし良かったら料理のコツを教えてください。どうすれば兄様が喜ぶような料理が作れるのでしょうか。

「君はあまり自分に得しないことに興味を持っているな」

「はい？」

ふとしゅんとなってる私に、兄様はそう言いました。

「俺は君の疑問に正直に答えたつもりだが、正直に言うと、あの時の俺はお腹が空いて何を食べても美味しく感じていた。その分、あの時の俺は味なんてあまり分からずに食べていた可能性がある。それに…」

「それに……？」

「君が作ってくれるものはなんでも美味しい。君もっと自分の料理に自身を持ってもいいはずだ」

……

……

……

…

「／／／／／／／／や、やだ、兄様ったらー＞＞カーン！＜＜」

「ぶっ！」

君が作ってくれるもの『なら』なんでも美味しいだなんて、そんな……

それじゃまるで、私が兄様の……お、…およめ……さん…みたいな…1

「へ……へへへ」

その後、私が兄様の頭を後ろから打ったせいで、兄様が湯圓の器に頭をぶつけて、更に食卓が壊れて気絶したことに気づいたのは、結構後のことでした。

＞pf＜

拠点：桂花　　その智謀が忌々しい

「ダメよ！」

「……俺は至極正当な要求をしているつもりだが」

「何が正当な要求よ、ふざけるんじゃないわよ」

あの苛立たしい事件の後、初めてアイツが私の執務室に来たと思ったら、とんでもない話をしてきた。

「あなたの甘食のための予算を以前の倍にしろですって？」
「君が俺の予算を削減したおかげで仕事の効率が通常の３割を切っている。これ以上の横暴はこの軍のためにも謹んでもらおう」
「横暴ですって！？」

初めてあいつに当てられた予算を見た時、私はびっくりした。
あんなのどっかの悪政をしている豚どもが自分の贅沢のために勝手に民の税金を搾取するのと何も変わらない。

「あんたはね！自分の立場が分かってるの？華琳さまはあなたのおやつ係をするために、街の民たちから税金を頂いているわけじゃないのよ！なんで、あんたのおやつの小遣いを軍の資金から当てなければいけないのよ」
「それは俺と孟徳の契約上の約束だ。君がそれに水を差す資格はない」

まったく、こいつのことは気に入らな行ったらありゃしない。
どうして華琳さまはこんな奴を城に置いているのよ。
……理由が分からないわけじゃないのだけど。

確かにこいつのことは苛つし、男な上にしかもすごくブサイクだけど、その頭だけは誰よりも良い。
この私よりも何手先、いや、何十手先を読んでいるのかも知れない。
実際あの時、私はあいつと私の能力の差に泣いてしまった。
どうしてこいつが華琳さまの軍師にならなかったのか、どうして私なんかのためにこんなことをするのか、さっぱりだった。
今になっても、こいつがいったい何を考えているのか、私も全部は分からない。
だけど、ひとつだけ言えることがある。

「何で前の倍にしなければいけないのよ」
「今まで我慢してきた分を摂りたいからだ」
あんた、何で虫歯しないのよ。
・・・・
・・
・
タッ
「……何だ、これは」
「何って、見ればわかるでしょ？象棋盤よ」
というわけで、私はあいつともう一度勝負をすることにした。
「私と賭けをしましょう。あんたがもしも勝ったら、あんたのいう通り予算を倍に当ててやるわ。だけど、あんたが負けたらもうこの話で私のところに来ないでちょうだい、いやそうと言わずに永遠と来るな」
「……なるほど、賭けを建前にして、俺の実力を測ろうとしているんだな？」
「っ！！」
こいつ…やっぱ油断ならないわ。

「そうよ！で、何？やるの、やらないの？」
「……良いだろう。先に二勝した方が勝ちでいいな？」
「良いわ」
あなたの本当の実力、今回でこの目で確かめてあげる。
＞pf＜
一戦目
トッ
「ちょっ、あんた馬鹿じゃないの！？そんなとこに弓兵配置させても打てないじゃない！」
「……」
さっきから何よ、こいつ。
騎馬で森の中に突っ込ませて火矢にやられたり、歩兵で騎馬を追いかけてきたり、弓に低い地勢を歩かせたり…負けたくて仕方がないように動いてるじゃない。
普通の文官にやらせてもこれよりは良い勝負できるわよ。
それとも何？私に自分の実力を明かさないとでも言うの？
良いわ、それはそれで、あなたの分の予算を他のところに回せるようになるのだから…
トン
「本陣空にして引っ張られて来るな！」
「……」

・・・・
・・・
・

結果は当然、私の勝ち。
私が本陣を取るまで、あいつの部隊は完全に崩壊していた。

「あんた、やる気あんの？」
「……ルールは大体分かった」
「は？」
「二戦目に行こう」

そして、二戦目、私は一戦目のあいつのような気分になっていた。

＞pf＜

「…あんた……さっきにやったのは何？」

私は二回目の象棋盤の上に起こった異変に無言では居られなくてあいつに問いただした。

「言っただろ。この遊戯のやり方が分からなかったから、適当に打って君の様子を見たんだ。…何故俺が一回勝負にしなかったと思ってる」
「！まさか……一回やっただけで私のやり方を見て象棋の打ち方を

覚えたっていうの？」

しかも、こんな打ち方なんて知らない。
いや、こんな用兵の仕方なんて聞いたこともない。
最初は一戦目とそう変わらないと思った。
相変わらず騎馬は森に突っ込んでいたし、歩兵が騎馬を追いかけていた。
でも、気づいてみたら、歩兵に突進してから悠々と逃げている先の森の中を迷ってると思っていたあいつの騎馬が出てきて挟み撃ちにされたり、伏せていた兵たちが、普段通らないはずの道を歩いていた弓兵が打った火矢にやられたりなど、完全に変則的な攻撃が続いた。
一旦、何の意味もないように見えた用兵がひとつにつながるとまるで無敵のような強い軍隊を化した。

これは…もしかしたら私、とんでもない奴を相手にしているのかもしれない。

「最後の一戦だな。先手はお前に譲ろう」

淡々と述べる奴の言葉に更に苛立った私は…

「ふん！」

音が鳴るように激しく駒を動かした。

・・・
・・

・

三戦目はなかなか膠着状態から手が進まなかった。
私も三戦目は気を引き締めて動いて、奴の変則的な動きに釣られないようとしていた。
こいつの手に乗るとさっきのように片っ端から戦線を崩れ落とされかねない。取り敢えず今は、この膠着状態を維持しながら、こいつの弱点を……

「……引き分けにするか？」
「…は？」
「両者攻めに向かう気がない。勝つ気がない戦いなんてして無駄。実戦でこのような膠着状態が続いたら軍はどうなる」
「……！」

こいつ、私に喧嘩うってるの？

「答えは両方負け。互いにジリジリを削られてる所を、他の第三の勢力が現れて全て喰らい尽くすだけだ。勝つこともできない戦いを長引くことぐらい愚かなこともない」
「そういう言い方するのだったら、あんたの方から責めてきたらどうなのよ」
「……」

トン

「！」

私の文句に、あいつは自分の戦線を下げてきた。
何？

何を企んでるの？

トン

トン

また下げてきた。

こっちが戦線を上げてくるように誘ってる？

「追わないのか？」

「あんた、何考えてるの？」

「……俺が考えていることは全て象棋盤の上に置いてある。あんたの目が狭すぎて見えてないだけだ」

「…っ」

あくまでも私を挑発する気ね。

その手には乗らないわよ。

・・・・

・・

・

その後もあいつはずっと戦線を下げて、本陣周りを包囲されるところまで至った。

このまま総攻撃をかけたら、被害は大きいとも、私の勝ち。

「あんたの負けよ」

「そうだな…戦はこのままだと俺が率いる赤の負けだ。だが……

君の袖下に隠れた俺の駒が、君の大将の頸を立つ」

「何！？」

その時、私は目を開いた。
まるでついさっきまで目が眩んでいたかのように、私の側の象棋盤の端っこに、あいつの部隊一つがぴったりと置いてあった。
あいつが本陣に着くまで、包囲網を構築している私の部隊は間に合わない。
あいつの部隊で戦線から抜けだしてきたものもないから、最初から残すものもなく全部包囲網に投入したのだ。
なのに、何故あんなところにあいつの駒があるのよ！

「その駒なら最初からそこにあった」
「は！？そんなわけないでしょ？最初に部隊を敵側に配置するなんて…」
「ルール違反で不戦敗だ。それがどうした。これが実戦だったとしたら、君は負けている」
「…！」
「お前は俺の変則的な動きに目をとられて、動かない駒になんて見なかった。それ以前に、自分の側に最初から敵の駒が置いてあったにもかかわらずそれに気づかない狭い目で大局を見ていたんだ」
「……！！」

……言い返せない。
最初から敵は戦線にあるものじゃなくて、内側に存在していた。
本陣の大将の頸を絶つ敵はもう内側に居たのに、私はそれに気づいていなかった。
基本中の基本、あまりにも当たり前すぎて忘れてしまっていたこと。

象棋としては不戦敗になる戦。でも、実戦の戦場なんて象棋盤の上より遙かに広い。
こんな狭い象棋盤も見ることができないのに、どうやって大局に乗って行くつもりなの…私？

「囲碁を打っている時とかよくあることだ。一隅になかなかいい具合に目をおいたと思ったら、他のところで自分の大馬が死んでいるのを見極めずに負けてしまうことなんて、一瞬気を抜いたらあっという間に出来てしまう。いつも全てを見ていないと、孟徳を支える軍師にはなれない」
「……あんた、私に説教する気？」
「…お前は孟徳の軍師にならなければならない。そして、孟徳の軍師はこの大陸のどんな奇才をもった軍師の前でも一頭地を抜くものでなければならない。俺は俺のために、孟徳の実力を全て活用できる状況を創り上げてあげなくてはならない。そのためには、お前は孟徳の頭脳になってもらう。大陸の誰よりも賢い頭脳が…」

そして、あいつは立った。

「三戦目は不戦敗。お前の勝ちだ。俺に当てていた予算は警備隊隊員たちの給料にでも当ててもらおう」

去っていこうとするあいつに、私は惨めすぎる声で叫んだ。

「なってやるわよ！」

ピタッ

「なってやるんだから！大陸一の軍師に…！あんたのその生意気な

口がもう二度と自慢気に私を教えるような物言い吐けないよう、誰よりも強い、誰よりも賢い、華琳さまの頭脳にやってやるわ。だからあんたも覚悟してなさい！」

「……期待しておこう」

・・・

・・

・

その後、私は暇ができたらあいつのところに突っ込んで象棋など囲碁などで勝負を申し出るようになった。

その度々、あいつに木っ端微塵たるまで砕けて泣きそうになって、ある時は本気で泣いた時だってあるのだけど、

でも、いつか絶対に勝ってみせる。

大陸の誰よりも、あいつよりも強くなってみせる。

あいつがそう言ったからじゃない。

私が華琳さまのためにそうなりたいからよ。

六話（前書き）

思わなく人気を得てしまったこの外史ですが、自分の本名は雛里√の方で、こっちの方は時間があったらぼちぼちやってく感じになってます。これからもこれほどの時間を空けて更新されると想いますのでご了承ください。

六話

流琉ＳＩＤＥ

「兄様、頼まれた資料持って来ました」

「……うん」

皆さん、お久しぶりです。典韋です。

最初季衣と一緒に護衛隊所属となっていた私は、華琳さまのお願い半分、そして自分の私心半分して今や兄様の仕事のお手伝いをしています。

仕事のお手伝いと言いますけど、具体的に何か主な仕事があるわけではなく、お茶などを淹れるなどの地味な世話から、他の部署から資料を持ってきたり、街の見回りの時護衛をするなど雑務から個人な世話まで幅広く働いてます。要するに兄様のお世話役というわけです。

兄様は見た目はああですが、すごく頭の冴えている方で、普通の人おろか、私たちの軍の軍師の桂花さんまでも、兄様の知恵には届かないところが多いらしく、もはや兄様は、私たちの軍になくてはならない人となっています。

でも、外のことではあんなにしっかりしている兄様ですが、自分のこととなるとまったく気を使わないのです。放っておいたら何日が経っても食事を取らなかったり、寝ることも忘れて仕事をするなど、誰かが常に見ていないとすぐに体調を崩して倒れてしまってもおかしくないぐらいです。

私が側に居るようになってからはそういったことは少なくなりましたけど、以前は大変だったらしいです。

にも関わらず、本人は大したことのないようにするから尚かつ質が

悪いです。
兄様がもうちょっと自分のことを大事にしてくださったら私ももうちょっと安心できるのに…

「る…典韋」
「あ、はい」

兄様には真名を預けたのですが、何故か兄様は私のことを真名で呼んでくれません。
私に限らず、華琳さんを含めた魏にある将の皆さんのことも真名をもらっていながら名前や字でしか呼ばないらしいです。
理由はわかりませんが、最近になって、兄様は一瞬私を流琉と呼ぼうとして、典韋に言い替えることが多くなりました。
これって、兄様が私に対して心を開けてくれている…とみてもいいのでしょうか。ちょっと嬉しいです。

「俺は最新の資料を持ってきてくれと言ったはずだが…？これはもう半年もすぎているだろ」
「すみません。でもあちらでもコレが一番最近調査したものだって……」
「…使えない奴らだ…」

そうつぶやいて、兄様は立ち上がりました。今日寝起きて初めてです。

「出かけるぞ」
「どこにですか？」
「街にだ。資料が無いなら自分で見て資料を作るまでだ」
「は、はい、お供します」

「…いや、今日はついてこなくて良い。視察がてらに行くのだから結構長時間出まわることになる」
「大丈夫です。というか、そんなに長く出歩くのだったらなおさら護衛は必要です。この前だって、私が知らない間出かけてお腹減って街の隅で倒れてたじゃないですか。私が間に合ってなければ、あのまま街のチンピラたちに素っ裸にされてましたよ？」
「……記憶にな、」
「前週の話です」
「……」

兄様は無言のまま部屋を出て行きました。
これならついて行っても文句は言わないでしょう。

＞pf＜

兄様の後をついて街で出ると、いつもの活気の良い陳留の街の情景が目に移ります。
この区画は、兄様の計画で造る最初から計画された計画地区だそうです。

「あぁ、あの肉まん美味しそう！」
「……」
「兄様、肉まん食べますか？」
「お前は食え。俺は良い」
「……」

いつもの無表情な顔に手はポケットに突っ込んで、腰は老いて絶対曲がるだろうなぁと思うぐらい曲げて歩いている兄様の姿を見ていると、この街で一番不審なのはこの人じゃないかと思ってしまうぐ

らいです。
実際、この街の治安を管理している人なのに……。
「典韋、この街を見て何か気づくことはないか？」
「はい？」
ふと兄様がそう聞いてきて、私はもう一度街の周りを見回しました。
「賑やかですし…いい街なのではないのですか？」
「賑やかだと言って必ずいい街とは言えない。街が賑やかなことは国と商店街の経済状況においていい影響を与えるのは確かだが、逆に治安の問題が多くなる問題もある……典韋、あの左から二番目にある黄色い頭巾をしたチビを捕まえろ」
「はい？」
「良いから早く、現行犯だ」
「！」
その言葉を聞いて私がもっと良くみると、兄様が言っていたその男は賑やかな人衆の中で人の財布を自分の手に取っていました。
「そこのあなた！」
「！」
私が大声で叫んで走っていくと、そのすりもこっちに気づいて逃げ始めました。
「街が賑やかだとああ言った泥棒をつかまえるにも一苦労だ」
そう暢気なことを言っている兄様を後にして私は自分の武器を取り出そうとしました。

「伝磁葉々（でんじようよう）なんて使ったら他の人たちにも被害が行くぞ」
「じゃあ、どうするんですか！」
「知るか。取り敢えず追え。そもそもつかまえる前に今から捕まえに行くという方がおかしい」
うわぁーん、言い返せない自分が馬鹿みたいで泣きたいですー！
・・・
・・
・

「待ちなさーい！」
「待てと言われて待つすりがあるかぁー！！」
兄様から離れて賑やかな街中でなんとかすりの姿を逃さず追う私でしたが、正直全然距離が縮む気がしません。
「あ！秋蘭さま！」
「？」
でもその時ふと、街の露店の前に立っている秋蘭さまを見つけたのです。
「その人泥棒です。捕まえてください！」

「何！？」
「！」
「ええい、退けーー！」

すりを目の前にしていた秋蘭さまがその人をつかまえるために前に出ました。
でも、その時、

「はぁぁーー！！」
「ぐぉーっ！！」
「！」「！」

突然露店場に座っていた人が立ち上がっては、秋蘭さまの前に立って走ってくるすりを見事に蹴り上げたのでした。
すりはそのまま宙に浮かんでさっき見たものを含めた人の財布たちと共に地面に落ちました。

「ぐぅ……ぅぅ…」
「こんな誰もが苦労をして生きていく世の中で、人の者を盗むなど、恥を知れ！」
「あ……」
「すごい」

銀色の三つ編みの髪に鋭い目つき、そして見事な蹴り攻撃を入れてからのその発言。
この女の人、ただの露店商人じゃないです。

＞pf＜

秋蘭ＳＩＤＥ

今日は姉者と華琳さまと共に、街の治安の視察のために出かけていた。

「華琳さま、北郷は連れて行かないのですか？」
「何！秋蘭、何故アイツの名が出てくるのだ」
「姉者、あいつはあの街を計画している者であり、治安を担当する警備隊長でもあるのだぞ」
「うぅん……それはそうだが…」
「確かに、一刀を連れていった方がこの視察の意義を考えれば妥当かもしれないわね。でも、一刀も自分の仕事があるわけだし、今更に連れていこうとしても断るに違いないわ」
「華琳さまがお呼びしているのに断るなどこの夏侯元譲の剣の錆にしてやります！」

ああ、相変わらず姉者は一々かわいいな。

「そういうわけだから、秋蘭には悪いけれど、今日は一刀は無しよ。それとも、彼が居た方が秋蘭には良かったのかしら」
「いえ、そんなことは……」
「まぁ、いいでしょう。それじゃあ各人分かれてこの街を視察しなさい。昼頃にはここに戻ってくるように」
「はいっ！」
「分かりました」

私は華琳さまにそう答えて、私に任された地区に向かった。

・・・

・・
・

「これは…ながなかすごいな」

北郷の計画通りに街を作り始めて半年。
私が通っている街は、北郷の街の開発計画が始まった後から造られた街、北郷が一番念を入れて作った街だ。

「…悔しいが、あいつがいつも華琳さまに言っている無礼言は実力から来ているというのか」

北郷の能力は、もはや華琳さまが居ない陳留ほどに欠かせないものになっていた。
北郷の発案で始まった、この街の開発案を含めた革新案の数々、少しずつだがその成果を見せてくれていた。
他の所では考えられないほどの速度で、我々の地域が発展して行く。
もしかしたら、北郷は政治面にあっては華琳さまや桂花よりも上かもしれない。
いや、そもそも何故あいつは我々の下に居るのだろう。あんな能力を持っているなら、この乱世の中、功を挙げて自分の軍を作り上げるとしたら、華琳さまの覇道において一番危険な存在になるだろうに……。
あいつが敵ではなくてよかったと思うぐらいに……

「…何を疑問に思っているのだ、私は」

あいつがそんなことをするはずがない。
あいつが我が軍に居ることを感謝するまでもない。

何故ならあいつは……

「うん？」

そんなことを考えながら歩いていたら、ふと異様な空気を感じた。
賑やかな街の中で、一箇所だけ静かな場所。
人群がないというわけではない。ただ、静かだった。

「…お前は…？」
「見ての通り露天商です。竹籠は要りますか？」

籠屋……？

「…良い籠だな」
「どれも入魂の一品です」

確か部屋の籠が壊れて、新しい奴が必要だった。
だけど、私はそれよりその籠を売っている者の方が気になった。
他の店の商人たちが人を呼び寄せるために頑張っている中、彼女だけは静かに、私のような人を呼んでいた。
人には気というものがあって、武人だとその気を読む能力を極めなければならない。
私の目の前にいるその露天商人は、とても静かに、でも逆に強い気を発していた。とてもただの商人とは思えないような……

「秋蘭さまー！」
「？」

そう考えているうち、私は慣れた声を聞いて振り向いた。
向こうから流琉が走ってきていて、その前には流琉に追われてるよ

うに逃げる男が一人。

「その人泥棒です。捕まえてください！」

「何！？」

「！」

その一瞬、座っていた露天商の女の気が動いた。

「ええい、退けーー！」

私がその男を制圧しようと構えた先にその静かに自分の気を秘めていた商人は立っていた。

そして、秘めていたその力を一気に目の前の泥棒男に叩きこむ。

「はぁぁーー！！」

「ぐぉーっ！！」

「！」「！」

見事な蹴りによって男は空に浮かびものすごい音と共に落ちた。

「ぐぅ……ぅぅ…」

「こんな誰もが苦労をして生きていく世の中で、人の者を盗むなど、恥を知れ！」

「あ……」

「すごい」

此奴、只者ではない。

＞pf＜

流琉ＳＩＤＥ

「捕まえたか？」

後ろこら兄様の声が聞こえて私はその女の人に見とれているのをやめて後ろを振り向きました。

「兄様、……って、なんですかそれは」

「見ての通り肉まんだ」

「どうして、肉まんを食べているのですか？」

「お前が走って行った後、ちょうど美味しそうな肉まん屋を見つけたのでな」

それは私が一緒に食べようと言った店の肉まんですよね？どうして私が言った時は冷たそうに言って、人が苦労をしてるうちに暢気に肉まんを食べながら歩いてくるのですか。酷いです。

「食べるか？」

「食べていた物を差し出さないでください」

「そうか…」

はっ！私は今、すごく勿体無いことをしてしまった気がします！

「それはそうとそこの君」

「！」

すりを倒した露天商の女の人が、兄様を見てまた構えました。

まぁ、確かに不審者姿ですしね、兄様は。

「俺はこの街の治安を任されている者。君の名前を教えて欲しいのだが」
「……楽文謙と言います」
「……」
相手の名前を聞いた兄様の目が鋭くなりました。
「興味深い……妙才。彼女が売っている竹の籠を経費で落としてもらえるか？」
「！」
「……北郷、一体何を考えている」
「さっきの動き、気に入った。例に言っていた俺の副将、この者を雇いたい」
「何？」
副将…？
確かに兄様は最近仕事に追われていて、ちゃんと外に出ることもないほど忙しいようでしたけど、会ったばかりの人にそんなこと…しかも相手は城を回りながら商売をする露店商人ですよ？」
「あの、私を雇いたいとは、どういうことですか？」
「聞いての通りだ。俺はこの城の街の開発、治安を一任されている者だが、人材がなくて最近良い者が居ないが探していた。だけどなかなか眼鏡に叶う奴が居なかった。だが、君の腕なら俺も納得できる」
「待て、北郷。そんな話、いくらなんでも勝手すぎるぞ」
秋蘭さまがそうおっしゃいましたが、

「孟徳は俺の副将を選ぶことを俺に任せると言った。妙才に文句を言われる筋合いはない。孟徳にも同じくだ」
「…！」
わ、わ、お二人が凄い勢いで互いを睨み合ってます。不味いです！
「に、兄様、ダメですよ。そもそも文謙さんは街を回る商人なのですよ？文謙さんの事情もあります」
「……お前はこれでも食べて黙っていろ」
「うっ！」
兄様は持っていた食べかけの肉まんを私の口に入れて黙らせました。
「あの、大変失礼な話ですが、その話は呑めません」
そしたら、今度は文謙さん本人がそう言いました。
「……理由は？」
「私は、いえ、私たちは私たちの村の人たちが作った籠を売るためにここに来ました。竹籠を売った金を街に持って帰らなければ村の人が食べる食料を買うことができません」
「……他にも連れが居るのか？」
「はい」
「その村というのはどこにある…」
「陳留から東に2日ぐらい行った先にある小さな村です」
「……なら、ここで働くことはできないと」
「はい、残念ながら、私は私たちの村のためにしなければいけないことがあります。私の力を高く見てくださることには感謝しますが、ここに仕えることはできません」
「……」

兄様は無言のままその人を見つめていました。
でも、本人がダメだといった以上、兄様だとしてもこれ以上無理を言うことはできないでしょう。

「…典韋、そいつは頼んだ」
「え？ああ、兄様！」
「北郷、どこへ行く」
「お前も来い、妙才。街の視察のために来たのだろ。お前もそろそろ約束の時間が近いから孟徳のところに戻った方が良い」
「お前、知っていたのか？」
「朝から剣の錆にするなど物騒なこと言っておいて何を言う」
「……！」

兄様は文謙さんが売っていた籠の中で一つを取り上げて妙才さんに投げました。

「なっ」
「お代はこれで十分だろ。お釣りは商売を邪魔した分だと思い給え」

そして、文謙さんにはそこにある籠を全部買えそうな金額を渡して街をあるいて行きました。

「……待て、北郷！」

秋蘭さまも、買った籠を持って兄様の後を追って行きました。

「……あの…大丈夫ですか？」

私は突然の兄様の変化に面食らっている文謙さんを見てそう言いま

した。

「え？あ、はい……少し変わった方ですね」

「私もそう思います。でも、悪い気があってそうするわけじゃないです。それに、兄様が自分から誰かが欲しいというの、私初めて見ました」

いつも万能で、何もかも一人でやってしまいそうな兄様ですが、体は一つ。誰かの助けが必要な時だってあります。

でも、私や他の人たちが側に居ても、本当に大事なことは全部自分でやっつけて、私何かに任せてくれるのは誰にでもできる小さな事ばかり。

そんな兄様が必要だと思う人なんて、どんな人だろうと思ってたのですが……なるほどって肯けれます。

「一緒に働けなくて残念です。あのそれじゃあ私もこれで失礼します」

「あ、あの、この金ですが…」

「持って行ってください。きっと兄様なりに気を使っているのでしょうから」

「あ……はい」

そして、私は気絶しているすりを連れて街の警備所に向かいました。

＞ｐｆ＜

華琳ＳＩＤＥ

「で、どうして二人して同じく竹籠を抱えているのかしら」

約束した時間に約束した場所に到着してみたら、春蘭と秋蘭が、約束でもしたかのように同じ竹の編み籠を持っていた。
おまけに、春蘭の籠の中には沢山の服が入っていて、そして秋蘭は…

「あなた、私が今日出かけるってわかってここに来たのね」
「……いつも政務で部屋に引きこもっている孟徳が出かけるのだ。これほど興味深いことは無い」
「あなたがそれを言うの？」

私よりも部屋に引きこもっているじゃない。
顔を見たのも何日ぶりか思い出せないわ。

「で、今日は何をしに来たんだ？」
「ふん！そんなこと見たら分かるんであろう！」
「……服を買いに来たのか？」

一刀は春蘭の服を詰めた籠見ながら言った。

「なっ！ち、違う！これは……その、季衣へのお土産だ！」
「なるほど……孟徳、何か興味深いことはないか？」
「はぁ……」

私はあなたの暇つぶしをするためにこんなことをしているわけじゃないのだけどね。

「まぁ、別に今日は孟徳が何でもないくだらないことのために出かけたとしても許そう。今日はなかなか興味深い経験が出来たしな」
「へー、それは是非とも聞きたい話ね。後で詳しく言いなさい」
「孟徳が持ってる話が興味深いものだったらな」

「ふっ、期待してるわよ？」
「……」
「そこのお方…」
その時、例の者がやってきた。
「貴様、何者だ。無礼にも華琳さま気安く呼び止めるなど…」
「春蘭、少し控えていなさい」
「はい？」
今日出かけた理由、一刀が仕上げた街の視察もあるけど、本名はこちら。
亡くなった父上の友人であり、有名な占い師であるこの人に会うことが、今日のお出掛けの目的だった。
「強い相をお持ちじゃな……世に二人もないとても強い相じゃ」
「一体何が見えると？」
「力……兵を揃え、優秀な智を持ち、この国の器を満たしまた更に潤わせるほどの強い相……この国に置いて、歴史に刻まれるほど偉大な英雄になれる者の相……」
「ほほぅ、良くわかっているではないか」
春蘭はそういうけれど、耳いい話だけなら聞くだけ無駄。他にはないの？
「じゃが、その力故にお主は孤独であろう」
「……！」
「お主の尊い想いの重さ故に、誰もお主のある場所にたどり着くことが出来ぬ。一層凡人の相を持っていれば、人に恵まれ、苦労をす

るも幸せに生きることができたものを……どうしても結局貴女はその道を一人で歩まなければならぬ」
「……」
覇道の道は、皆のための者ではない。
それはたった一人にのみ歩くことが許された狭い道のり。
わかっている。私はこの道を一人で行かなければならない。
「乱世の奸雄よ。誰が貴女と共に歩むことが出来よう」
「……私にその資格がないと？」
「……その資格があってこそ、天から授かし才は呪いであることでしょう」
「貴様、華琳さまを愚弄する気か」
秋蘭が後ろで弓構えていて、私はそれを止めようとした。
「なかなか興味深いことを言ってくれる。俺の相も見てはくれないか？」
でも、先に声を出したのは一刀の方だった。
「北郷！」
「だからお前は孟徳と同じ道が歩けないんだ、妙才」
「…！」
「……」
一刀…
「どうなんだ、俺の相は？」
「……この世に属しない者よ。何故ここにおる」

「聞いているのは俺の方であって、あなたは答えてくれる方だ。違うか？」

どういう意味？

「……世と戯れし者よ。何故それを私のような者にお聞きなさる」

「答えろ」

「……大局の示すまま、流れに従い逆らわぬようになされ。さもなければ、貴方の身はあなたの言動一つ一つで破滅されていくであろう」

「…身を慎めてか」

「それが貴方の質問の答え」

「……孟徳、彼に謝礼を」

「あなたは？」

「無一文だ。用があって全部使った」

まったく……

「なかなか興味深い話が聞けた。感謝しよう」

「で、あなたのその興味深い話って何？」

「良い将を見つけた。是非ともこちらに入れたい」

「で、その者はどこに？」

「が、任官を断られた」

「何？使えないわね……」

期待して損したわ。

「自分で行くなどとは言わないのか？」

「私がそうするぐらいだったら、あなたがここに居るわけがないでしょ？その者が住んでいる村まで付いていってでも仕官させるでし

ょうに…」
「……ふっ、まぁ、暫くは待ってあげてもいい」
「また来ると？」
「それは言えないな。身の破滅が関わっている故……」
「……」

相変わらず、勝手ね。

「春蘭、秋蘭、戻るわよ」
「は、はぁ……」
「なぁ、秋蘭、今のは一体どういうことなのだ？私にはさっぱり分からぬぞ」
「……」

難しそうな顔をする秋蘭を後にして私は先に向かう一刀の後追った。

「あなた、私の前に立つなんて無礼にもほどがあるわよ？」
「孟徳、空から背を測れば、この中では孟徳が一番背が高そうだな」
「……あなた、死にたいの？」

・・・
・・
・

七話（前書き）

一刀の裏設定を入れながら、以前一刀が季衣に関して言っていた言葉も意味もここでわかってもらったら幸いです。

七話

一刀ＳＩＤＥ

ちゅん、ちゅん

「……」

……眠い。

まだ寝て…一刻ぐらいしか経ってない。もっと寝たい。

……何故眠れないんだ。そもそも何で起きたんだ？

「……典韋？」

そう、典韋だ。

いつもならこの時間だと典韋が起こして来るはずだった。

俺がどんなに遅く寝ても、この時間だと必ずあのこが起こしに来る。

なのに……何故今日はその気配が無いんだ？

「っは……」

重い体を起こして門を開くと外から冷たい風が体を刺す。

「っっ……典韋？」

周りを見ても、典韋が来る様子がない。

最近、賊の多発で、魏の将たちはあっちこっちに出立していた。

軍師の荀？と俺を除けば、他の者たちは城に居る時間より外に居る時間が長いぐらいだった。
俺の世話役だった典韋もたまたま妙才と共に出ていた。
一昨日にも近くに賊が現れてそれの退治に向かって昨日の夜ぐらいに帰ってきた。
帰ってきて俺のところ顔を出している時に少し疲れ気味だったが…
まさか……

「あ、兄様」
「…典韋、来たか……！」

やっと現れたかと思って振り向いたたら、典韋の姿は明らかにおかしかった。

「兄様、起こしてもないのに、先に起きました？」
「……典韋」
「はい…？」
「とりあえず俺の部屋で寝てろ」
「ふえ？」
「良いから休め」
「ふわっ、ちょっと、兄様！？」

俺は典韋を抱き上げて無理矢理俺の部屋の、俺がさっきまで寝ていた布団に寝かせた。

「兄様、私大丈夫でｓ…」
「……いつも俺に健康的な生活しろと言う奴がそれか」
「あぅ……」
「……寝てろ。俺は孟徳に話がある」

黙って見ていたが、もう悠長にしてられない。

＞pf＜

華琳ＳＩＤＥ

「典韋が倒れた」

「……！」

朝の御前会議の準備していた私の部屋に突然一刀が入ってきた。
彼のところから来ることは初めてだったから少し驚いたけれど、それよりも驚いたのは、典韋が倒れたという言い出す彼の声の荒さだった。

「…流琉は大丈夫なの？」

「さっき顔を見たら顔色が真っ青だった。これ以上の働きは、彼女の上司として黙って居られない」

「一刀、あなた怒ってるの？」

「……」

彼はこんなに感情を制御できない姿なんて初めてみたわ。
春蘭に対して呆れたり、静かに怒ってるのは見たことあるけど、こんなにありのままに怒りを吐き出すなんて……

「流琉のことはごめんなさい。私が彼女に無理をさせていたのかもしれない。だけど、将自分の体は誰よりも自分が一番大事にするべきよ。自分の体の状態を考えないで無理をしたのは彼女自身よ」

「……そう、孟徳はそういう人間だったな。忘れてた」

「……」

明らかに侮辱された気がしたけど、黙って彼の話を聞いた。
「もう良い。黙って膠着状態が解けるまで待つつもりだったが、既に将兵とも限界だ。この黄巾党との戦い、早急に終わらせる」
彼はそう言って外へ向かった。
黄巾党…確か報告によれば最近現れる賊たちは皆して黄色い布を巻いてあったという。
やっぱり、彼はこうなることを事前に知っていたのかしら。

「一刀、ちょっと待ちなさい」
「何だ、孟徳」
「昨日また賊…あなたがいう黄巾党の群れが現れたという報告が届いたわ。他の娘たちも疲れているし、元なら私が桂花を連れて出るつもりだったけど、あなたが代わりに言って頂戴」
「……」
「自分の目で状況を見た方が、情報収集にも容易なのではないかしら」
一刀は少し黙ってまた口を開けた。
「……出立の準備はいつ整える？」
「昼過ぎよ。副将には桂花行かせるわ」
「荀？には他にやらせたいことがある。助っ人なら許褚を頼もう」
「季衣も最近無理をしているわ。休ませてあげたいの」
「……許褚には俺が言う。孟徳は典韋のための医員を手配してもらおう」
「…ええ、分かったわ」

一刀は敢えて許楮を副将にすると言って外に向かった。
……一刀、あなたは私がそんな鬼に見えるの？

＞pf＜

季衣ＳＩＤＥ

「え！？流琉が倒れたの！？」
「…そうだ」

お兄ちゃんはそう淡々と述べた。
確か昨日見た時にちょっと疲れてるとは思ってたけど、まさか……

「それで、彼女の代わりに今回の俺が今回の殲滅戦に出る。許楮には副将として付いてきてもらおう」
「え？お兄ちゃんが…？」

ボク、お兄ちゃんが戦に出るのって、最初に会った以来見たことないんだけど…
こう言ったら悪いけど、お兄ちゃんってあんま強そうじゃないし……

「……相手が元譲ではないと従えないのか？」
「え？あ、いや、そういうんじゃないけど……」
「なら良い。俺が副将で、許楮が大将ということにしよう」
「ふえ！？」

ボクが大将？

「そ、そんなことして大丈夫なの？」
「肩書きだけのものだ。責任ならどうせ俺が取る。君がボクが信用

できないと言うのなら無理言って従えとは言わん。だが、今回の戦には元譲や妙才でなく君に出てもらおう」
「……お兄ちゃん、どうしてそこまでするの？」
「何をだ？」
「お兄ちゃんって内政専門だし、今まで戦争に出るの見たことないけど、今回だって流琉のお代わり役割で出るって言ってるんだよね。それに、ボクが初めてこの軍に入る時でも華琳さまと真正面で反対していたし…お兄ちゃんって一体何者なの？」

春蘭さまや秋蘭さまも、このお兄ちゃんに対しては『好きではないけど逆らえない』という感じで接していたし、あのうるさい桂花さまでも、お兄ちゃんの前では静かになる。まるで皆、お兄ちゃんのことを怖がっているように……

「……俺も昔はお前たちのような子供だった」
「ふえ？うわああ、何すんだよ」

お兄ちゃんは私の頭をぐしゃぐしゃにした。そのせいで巻いていた髪が解かれちゃった。

「出立は昼過ぎてからだ。遅れるな」
「…んも……」

やっぱわかんないよ、あのお兄ちゃん。

＞ｐｆ＜

流琉ＳＩＤＥ

人って、自分の意志で動いているつもりだと考えていても、実は自分のことをちゃんと理解していない時が多いのと思います。
例えば、人って最初自分が病気だということに良く気づかないようなものなのです。
そして、誰かに顔色が悪いとか、休みなさいと言われてやっと、自分の調子が正常ではないということに気づくのです。
今の私がそうです。

「朝兄様に言われるまではまだピンピンしていた気がするのですが……」

今じゃ自分の部屋の布団で大人しく休んでろという『上司命令』を下された始末です。
いつもなら私がだらしない兄様の生活に対して色々と言う側なはずなのに、こうして自分の体の異常に気づかずにいたなんて、無念です。

「典韋、俺だ。入るぞ」
「…へ？」

そんなことを考えていたら、突然兄様が部屋に入って来ました。

「…兄様？」
「……」

いつものように目の下には大きなクマができていて、立ってる姿勢はおかしいですが、いつもと違うことがあったとしたら、いつもはポケットに入ってるはずの両手は、代わりにお粥を持ってるということでした。

「ちょっと作って来た。後で食べろ」
「……兄様って料理できたんですか？」
「出来ないとは言った覚えはない」

兄様はそう言いながらお粥の皿を布団の近くの円卓に置いて、自分はそこにあった椅子を私の近くまで持ってきて座りました。いつものように両脚まで席にあげて、どこかへでも倒れそうな座り方です。

「お前の代わりに賊の討伐に出ることになった」
「兄様が…討伐にですか？」

兄様って戦いなんて出来なかったんじゃ……

「誰か一緒に行くのですか？」
「許褚がな」
「季衣が……」

それなら、多分大丈夫でしょう。

「ごめんなさい、私が倒れたせいで兄様にまで戦場に出るようにさせちゃって……」
「……」

兄様は何も言わないまま私を見ていました。

「流琉、ここに居るのはどうなんだ？」
「どう……とは？」
「村に帰りたいとは思わないか？」
「……へ？」

私は兄様がどういうつもりでそんなことを言うのかよくわかりませんでした。

「今村に戻ったら、賊とは言え人を殺すなんて辛いこともしなくても良いし、危険な目に会わずとも済む。君と許楮の住む村は既に孟徳の支配下にあるし、何が起きてもこっちから直ぐにでも助けに行ける。君に無理をしてまでこれからも戦争をしろとは言わない」

もしかして、兄様はここに居るのをやめなさいって言ってるのですか？

自分の体の調子も分からずに、人に迷惑をかけるぐらいだったら、最初から居ない方が良いって…？

「兄様、私が無理をして倒れちゃったのはごめんなさい。でも、私は沢山の人たちを助けたいです。まだ幼いですけど、私と季衣にはそれほどの力があります」

「……解っている。君と許楮の力は孟徳にとって心強いものとなるだろう」

「なら……」

「典韋、俺がお前ぐらいだった頃、俺は大学……国の才のある若者たちが集まる施設に居た」

兄様は突然、自分のことを話し始めました。

「普通二十代以上の者たちが集まるその場で、当時の俺は明らかに幼い者で、それはとても異例な状況だった。それは、俺は他の人たちとは違う才能を持っていることに気づいた親や周りの人たちが、俺の才能をもっと有用に使うためと俺の意志とは関係なくそういった施設に入れさせたんだ。もちろん、当時世間のことは知らず、た

だ知識的な高みを欲しがっていた俺は、そういった状況が俺にとって悪くないと思った」

そこまで言って、兄様は一度目を閉じました。

「だけど、俺は俺自身が思っている以上にまだまだ子供だった」

「……？」

「確かに天性的に才能もあって意欲もあった俺だったが、俺の体はまだまだ大人になってない未熟な体だった。その体で大人たちが勉強を追いつくには、体は持たなくなってきた。結果的に、ある限度を越えた時、俺の体は悲鳴を上げた。俺は４１度８分という高熱を出し倒れて、そのまま病院に送られた。一週間ぐらい生と死の境を渡り合っていた俺は奇跡的に生きたが、長い高熱が続いたせいか、俺の頭は以前のような才能を失っていた。俺の年頃よりすこし増しなぐらいの知的能力ぐらいしか出せなくなって俺は、当然のように例の施設から追い出された。そして、更に、俺の親からも見捨てられ、挙句には戦争などで親を失った子供たちを養ってくれる施設に入ることになった」

「……そんなのって……」

おかしいです……死ぬかもしれなかった息子が生きて帰ってきたのに、それを天才じゃなくなったからって、見捨てて、父も母もあるのに他の誰かも知れない人に任されることなんて……。

私のご両親は盗賊が村に現れた際、まだ喋りも出来ない私を守るために二人とも命を落としました。

その後私は、季衣を育ててくれていたおばさんのところで季衣と一緒に育って来ました。

兄様の話は分かります。確かに兄様のお父さんはお母さんも、幼い時の兄様に期待しているものがあったでしょう。でも、その才を失ったからと言って……

「俺を同情して欲しいとこの話をしたわけではない」
「あ……ごめんなさい」
「……幼い頃から人並み以上の才を持つと大人たちから期待される。それは、決して悪いこととは言えないだろう。でも、そんな大人たちがお前たちに期待しているものは大人と同じぐらい、いや、それ以上のものだ。それは時には君のような幼い体と心ではまだ耐え切れないものである時だってある。子供はそんな大人の期待にただ応えようと頑張るが、それが己を怪我することになることは、俺が見るからには明らかだ」
「……」
「お前をここに連れてきた俺がこう言うのも図々しい話だが、これからも孟徳や俺はお前に普通の子供になら耐え切れない、大人としての対応を押し付けることになる。俺の親は俺の才をもっと大きく使うためと言っていたが、実はそうじゃない。実った木の実は、それが早く実ったら早く収穫して、遅く実ったら遅く収穫するだけだ。早く実ったとしてそれがもっと大きくなるまで待つってことはない。幼い時にその才を開花させたなら、幼い時に売りつけてしまう。それがこの世界だ」
兄様……
「……俺は許楮にも同じ事を言う。でも、多分許楮は俺が言うことを全部は理解してくれないだろう。だから許楮が帰ってきたら、お前が季衣と二人で話し合え。そして、これからどうするか二人で決めろ。帰りたいと思うのだったら、孟徳には俺がなんとでも言う。でも残るのなら、俺が今までのように甘やかすとは思うな」
兄様はそう言って立ち上がりました。そして、そのまま何も言わず部屋を出て門を閉じました。

「……兄様」

私が暫く兄様が出た先を見つめて、兄様が置いていったお粥を自分の元へ持って来ました。

「……美味しい」

ちょうど食べやすいぐらいに冷めていたその粥を食べながら、私はふと、兄様は誰かにお粥を作ってあげたことなんてあっただろうかと思いました。

＞ｐｆ＜

華琳ＳＩＤＥ

「勝手なことを言ってくれたじゃない」

私は流琉の部屋の門際に立って、門を閉じた前で歩き出す一刀の姿を見ながらそう言った。

「……何をしてでも勝ちたければ、孟徳、女でも老人でも病者でも六歳以上の子供でも徴兵して盾用の軍を作れ。そしたら俺がこれからでも天下をとれるような策を作ってやる」

「そんなこと言ったわけじゃないでしょう？捻るにもほどが……っ！」

言葉を続けようとする彼の顔がすごく近くて私は言葉を止めた。

「……曹孟徳、お前もまた典韋と同じ枠に入るとは思わないか？」
「……なんですって？」
「自分の位置を謝って、たとえをう押し付けた大人はなくても、お前はまだ大人とは呼べないのかもしれない」
まるでさっきの流琉に言った話の中に出てきた不憫な少年がこうなったとは思えないほど冷たい瞳で、私を見つめていた。
流琉もこの目を見ていたのかしら……。
「ふん、話にならないわ。私は覇王になることを誓った者。子供扱いなんて不要よ」
私はいつか天下の全てを私のものとする。そんな私を子供扱い出来るものなんて、この世にはない。
「…既に立派な大人だって言いたいのか……子供は皆そう思う。俺もそう思った」
……この男を除いては…
「……あなたが流琉に言った話、それで全部じゃないわよね。何があったの？」
「……有り触れた話だ。聞いて面白い話でもない」
子供の才に期待していた親、そしてその才を開花させるところで失った子供。子供にかかっていた魔法は消えたはずなのに、それでもまだまだ親は子供に大人の責任を持たす。大人の対応を望む。……
……そこから子供の地獄は始まるのよ。

「そうね…」
「他に使えそうな者なら俺が探そう。二人が心を決めた場合、そのまま行かせてやってくれ」
「どこまでも決めるのはあの娘たちよ。あなたにもこれ以上彼女を追い詰めないようにお願いするわ」
「…あの二人がお前の期待を損ねるとは微塵も思ってないようだな」
「当然よ。そう思ってたら最初から私の元に入れてもないわ」

私がそう言いながら誇らしげに鼻笑いをすると、、彼もまた怖い目つきから、いつもようなちょっと不気味な顔に戻った。

「……孟徳、君との賭けはいつも楽しみだ」
「ええ、ほんと…何賭ける？今度こそ真名で呼んでもらおうかしら」
「……天才の勘は計算にはまらない。油断できないところがある」
「あら、怖いの？私との勝負が」
「……俺が負けたら、桂花にやった宿題の答えを孟徳に教えてあげよう」
「宿題？」
「……そろそろ時間だな。俺は討伐に出る」

彼はそう言いながらまた腰を曲げて異様な歩きをしながら去っていった。

「……この曹孟徳にまだまだ子供…ね……」

人のことなんて言えないくせに…

・・・
・・

.

七話（後書き）

いろんな外史を同時に書いてるとちょっと手を離していた外史は変になってしまう時があるから困ります。
実はこれ、元々は単発ネタのはずのものでしてね……

次回は、凪たちの再登場と（つうか再登場は楽進だけの問題ですが）一刀が華琳に対して子供だと言っていた言葉の意味を紹介できたらいいなと思います。
書いてみないとわかりません（笑）
では、意見や感想などお待ちしております。

ノシノシ

八話（前書き）

書いていたら思ったより長くなりました。
計画なら次回に書くものまで今回に終わるはずだったのにな……

八話

桂花ＳＩＤＥ

「うぅぅ……」

昼頃、私はお昼を食べることも忘れて集中していた。
最近は色々忙しいことを言い訳に部屋に政務室でほぼ住んでるようにしていたけれど、今日はそうも出来なかったことだったので自分の部屋でやっていた。
城の書庫から持ってきた地図や資料たちで部屋はあいつの部屋にも負けずと雑になっていた。
あいつ、というのは紛れも無くここ陳留、いやこの大陸で一番汚い存在である、北郷である。

「桂花、入るわよ？」
「か、華琳さま、し、しばしお待ちを、うわぁーー！！」

そんな時、突然華琳さまが訪れたことに驚いて、私は慌てて部屋を片付けようとしたけど、足元を誤って竹簡を踏み滑ってしまった。

「大丈夫なの！…って、何よこれは…」

私が尻もちをつく音に華琳さまが驚いて入ってきては、私の部屋を見て呆れたため息をつかれた。

「桂花、なんなの、この汚れた部屋は。幾ら忙しいと言っても部屋の掃除もちゃんとしないだなんて関心しないわよ」
「も、申し訳ありません、華琳さま。でも、これにはわけが……」

頭にいつも頭巾の代わりに転けたせいで机から落ちた地図を乗せた間抜けが姿で私は言った。

「一体どうしたの？　聞くと、一刀に何か頼まれたようだけれど」
「そ、そうなのです！　こうなったのも全部あいつのせいです！」
私はそうあいつに責任を押し付けたけど、強ち嘘でもなかった。
大体、あいつがあんな『無茶な話』を言ってなければ、こんなはめにはならなかったはず。

「どういうことなの？　あなた、桂花に一体何を頼まれたの？」
「……あいつに、今集まった情報だけで、黄巾党の本隊がある場所を絞り出せと言われたのです」
そう、それはとても急な話、実際には今日の朝の話だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「賊の本拠地？」
「そうだ。今世に蔓延としている黄色い布をした賊団。命名『黄巾党』の本拠地を探し出せ」
「簡単そうに言ってくれるけど。大体そんなの現状ではわからないわ。私も遊んでるわけじゃないのよ。そんなものあったらとっくに探していたわよ。それに、たとえ探しだせたとしても、今の私たちの戦力ではこの賊の本隊を叩くのは……」
「そこまでは考えなくて良い。俺が知りたいのは、お前に今あいつらの本拠地が分かるほどの実力があるかどうかについてだ」
「……待って。その言い方だと、あんたまさか、あいつらの本拠

地知っているというわけじゃないでしょうね」
「荀?の能力なら特定した場所までとは行かずとも、2，3カ所にまで場所を絞るまでは出来るだろう。荀?の成長にはなかなか興味を持っている。期限は俺が今回の討伐から戻ってくるまで」
「そんなの知ってるならさっさと教えなさいよ。どうしてあんた知ってたくせに今まで話さなかったのよ」
「……言っただろ。荀?の成長がどれほど進んだか興味があるからだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

なによ、人のことを完全に赤子扱いして……
見てなさいよ。絞りだすと言わず、確定させて討伐する策まで完璧に立ててあげるんだから……！

「そういうわけで華琳さま！」
「な、何？」
「申し訳ありませんが、私はこれからしばらくこんな風に過ごしていますので、どうかお赦し下されば、必ず華琳さまのために良い結果を出せて見せます！」
「……そう、分かったわ。それでこそ我が張子房よ」

華琳さま……

「…はいっ！」

>pf<

季衣ＳＩＤＥ

出立して二日目、ボクはお兄ちゃんにある話を聞いていた。

「…へ？」

「話はそれまでだ。典韋にも同じことを言ってある。二人で話して決めてもらおう」

「なっ、ちょっと待ってよ、お兄ちゃん」

どういうこと？

どうしてボクたちにそんな事言うの？

お兄ちゃんが言った話が最初がわからなかった。

でも、良く考えると、私たちに華琳さまの側、春蘭さまの側にから離れろと言っているということは分かった。

「ボクたちのことが邪魔になるとでも言うの？」

「何？」

「お兄ちゃん、実は流琉ちゃんが頭良いし、ボクも強いから自分の立場が狭くなるのを恐れてそんなこと言うんだよね」

春蘭さまが言ってた。

お兄ちゃんは有能ではあるけど、他の人のことを馬鹿にしてまるで自分だけが華琳さまのために働くかのようにしているって。

だから、ボクたちのことも要らないって言ってるんだ。

「ボクだって皆を守れる力があるんだよ。だったらそんな力を使って何が悪いの？どうしてお兄ちゃんは大人だっていう理由で勝手にして良くて、ボクたちは力があるのにまだ小さいからと言って無視

するの？」
ボクと流琉には『守れる力』があった。
だから村の人たちを守って、今度は華琳さまの元でもっと沢山の人たちを賊たちから守ることが出来る。
そんなことをやめなさいなんて言われてその通りにするのは、今賊に苦しまれている人たちの死を見逃せと言ってるのと一緒だよ。

「……許褚、お前たちが住んでいたその村。襲って来る盗賊があったらその度にお前と典韋二人だけで賊たちを追い払ったな」
「そうだよ。ボクと流琉が村で一番強いから……」
「他の大人たちは？」
「へ？」
「…他の村の若い男たちは、何をしていた」
「何って…それは……」
「村の安全を、ただ力がちょっと強いからと言ってまだ子供なお前たちに任せて、自分たちは死ぬことを恐れて家の隅で妻と娘たちと一緒に震えていた。そうなんだろ」
「で、でも、村の人たちは皆戦ったことなんて、ないし、ボクと流琉だけでも十分守れたから……」
「許褚があの荒野で戦っていた時でもか？」
「……！」
「あの日、お前は元譲がそこに行って居なければきっと敵の数に押されてやられていた」
「そんなことないよ！」
「お前みたいな女の子を捕まえた盗賊たちがどうするか知ってるか？」
「……」
「そんな危険を背負って、村の皆のために戦っているのが、たった小さな女の子二人だった。大人たちはなにをしていた。力のあるも

のが力無き方を守ることは素晴らしいことなのかもしれない。でも、そんな時守られる側は、守る人の苦労を知らない。その危険さを知らない。だからそれを感謝しない。増してその守ってくれる相手が、ほんとなら逆に立場であるべきの子供。そんな逆な構造がいつお前の肩を押しつぶすか分からない。そしてここに来た後、その重みは更に増した。その証拠に典韋は実際倒れた。お前は自分が自分に出来る以上をしようと無理をしていないのか？」

「それ…は……でも」

「生まれてから強くて、それを人を守るために使うことなは素晴らしい考えだ。でも、子供は自分の能力以上の期待に押し潰されやすい。大人たちがお前たちを過信するからと言ってお前たち自身まで自分の能力を持っている以上に過信したら結局お前たち自身の身を滅ぼすだけだ。お前はその覚悟ができてるのか？」

「ボクは…」

ボクがそれ以上何か言おうとしたけど、そこで斥候に言ってた兵士さんが報告をしに来ていたよ。

＞pf＜

ボクとお兄ちゃんが連れてきた兵の数は全部で五百。

反面、斥候が会ったとする賊たちの数は……

「二千…？」

「はいっ、しかも、途中で義勇兵に会って、その義勇軍は撃破されて今は追われています」

義勇軍なら…賊たちをやっつけるために上がった官軍や諸侯たちの

軍以外の民たちだけで集まった軍。
当たり前にその力は私たちよりも弱いし、数も揃ってないはずだよ。
早く助けてあげないと…

「お兄ちゃん！」
「……情報がどこかで狂っている。このまま言っても、義勇軍と一緒に俺たちも逃げまわるはめになるだけだ」
「じゃあ、義勇軍の人たちをあのまま死なせるの？」
「……」

お兄ちゃんは黙り込んだ。
やっぱ、このお兄ちゃんは信用できない。

「全軍に告げて。これから義勇軍を助けに行くよ」
「は、はっ！」
「…許楮」
「ボクが大将なんだよね。お兄ちゃんがしないのだったらボクがするよ」

ボクはこのお兄ちゃんとは違う。
ボクは沢山人が死ぬのを見てきた。
もうこれ以上は人が死ぬことを見たくない。
増してや死ぬと分かってて見殺しにするなんて、そんなこと有り得ない！

「……陳留にここの状況を知らせる伝達を。夜までは到着して、翌朝には援軍が出立出来るように頼もう。報告の任はそのままお前に任せる」
「は、はっ！」

お兄ちゃんはボクにそれ以上何も言わず、報告に来た兵士さんにそう言って、目を閉じたよ。

「負けると分かって尚戦う。……それもまた興味深い。武人の矜持という奴か」

あの時お兄ちゃんがなんとつぶやいたのか、義勇軍を助けるって考えで頭一杯でボクには全然聞き取れなかったよ。

＞ｐｆ＜

凪ＳＩＤＥ

「凪ちゃーん、このままだと追いつかれちゃうのー！」

「わかっている！くっ、まさかあれほどの数だったとは…」

「完全に相手を見誤ったで……このままやと全部やられてまうわ」

私たちは義勇軍を率いていた。

目的はただ一つ。人たちを苦しめる賊をやっつけるためだった。

でも、親友たちと一緒に人を集め始めたこの義勇軍だったが、現実は我々が思っていたより遙かに厳しかった。

私たちは数で十倍以上負けている賊に出会い、そのまま敗走していた。

逃げている兵たちの指揮は低く、追ってくる賊たちの勢いは我々との距離が縮むほど増していく。

このまま追いつかれてしまっては皆殺しだ。

「凪、今先頭の人から連絡が来たんやけど、横から官軍が来ているらしいで」

「官軍？」

この辺りで官軍だと…恐らく曹操軍か？
助けに来てくれるのだろうか？いや、それは安易すぎる考えかもしれない。

「数はどれぐらいありそう？」
「良くは知らんが、あっちの賊よりは遙かに少ないらしい」
「…なら、恐らく助けには来ないだろう」
「えー？何で？！」

紗和は必死な顔で聞いたが、現状は厳しい。官軍が今の状況を見て助けに来る可能性はほぼないと見ていいだろう。

「あの賊たちは我々と官軍を合わせた数よりも多いし、我々に勝ったせいで士気も充満している。そんな時に軍を突っ込ませて乱戦するのは得策じゃないだろう。無駄に自分たちの兵を犠牲にするまでだ」
「そんな……」
「もう逃げてるだけではどうにもならない。死ぬ覚悟で戦わないと全滅だ」
「もうちょっと行くとアイツらに襲われて廃墟になった村がおるはずや。先ずそこに行って、守り抜こう」
「そこの村人たちは？」
「ほぼ全員他のところに避難して、故郷を離れないと言う人たちだけ残ってるはずやで」

関係のない村人たちを巻き込むわけには……

「どうせこのままウチらがあいつらにやられても、結局またあの村を襲われるだけやで。ここは村の人たちに話して、なんとしても村

を守りぬくしかない」
「……そうだな。仕方ない。紗和！真桜！負傷した人たちを連れて先に村に向かって防御する準備をしてくれ。私はまだ戦える人たちと一緒になんとか時間を稼ぐ」
「わかったの」
「気をつけぇな」

私が甘かったせいだった。
自分の力を過信したせいで、親友たちを、私たちを信じてついてきてくれた人たちの命を無駄に散らすわけにはいかない。

「戦えるものは私に続け！仲間たちが逃げきるまで時間を稼ぐのだ！」
「「はいっ！！」」

こんな状況にも関わらず、命を惜しまないで私に従ってくれる人たちにただ感謝するだけだ。

＞pf＜

季衣ＳＩＤＥ

「義勇軍の一部が反転、賊の群れに向かって進軍してます」
「殿を務めるつもりだろ。が、あのままだと時間を稼ぐこともろくにできない。助けるつもりなら今のうちだ」
「分かってるよ。全軍、もっと急いで！横から賊たちを付いて混乱させるよ！」

歩兵が主な私たちの軍だから、あまり速度が上がらない。間に合う

のかな。
ボクだけでも先に行ったら…
「お兄ちゃん、ボク先に行って…」
「お前が軍の大将だ。どこに行くというのだ？」
「でも、このままだと義勇軍が賊に追いつかれるまで間に合わないよ！」
「……」
お兄ちゃんは暫く考えて、
「お前が離れたらボクはこの軍を反転させる」
「なっ……！」
「許楮、これは負け戦だ。我らの状況を考えたら元はしてはいけないこと。お前はこの兵たちを死地に突っ込ませている。お前は義勇軍を助ける以前にお前に従う兵たちの命に対して責任を持たなければならない」
「っっ……！！！」
悔しいけど、それはお兄ちゃんの言う通りだった。
ボクが無理矢理なことを言っているのだって分かってる。
ボクは無理をして、あの人たちを助けようとしているけど、それは逆に言うと、ボクたちの軍の兵士さんたちを死地に向かわせていること。ボクはこの軍の大将だから、この人たちのことも考えなければならない。
でも、だったらどうすれば良いの？
「……俺が向かおう」
「お兄ちゃんが？でもお兄ちゃん戦えないんじゃ……」

「俺はどうせここに居ても統率にもそれほど役に立たない。が、あいつらの動きを止めることは出来る。五十人ぐらい借りるぞ」
「あ、うん…」
お兄ちゃん、反対してるんじゃなかったの？
「……」
＞pf＜
一刀ＳＩＤＥ
……不合理的だ。
無茶すぎる……。
それでもあの娘たちに俺と同じ思いをさせるわけには……
＞pf＜
凪ＳＩＤＥ
「ぐぁーっ！」
「へへー、全部殺せー！ただ女生かして捕まえろ！」
「っ、下衆がー！」
脚に気を集中させる。そして、一気に跳ばす！
「猛虎蹴撃！！」

「ぎゃーーー！」

前にあった二十人ぐらいの盗賊たちが気の波動に跳ばされていく。

「はぁ……はぁ……」

でも、それももう限界。

でもまだだ！まだ紗和たちが逃げられるほど充分な時間を稼げていない。

もう少し……

「もらったーー！！」

「！」

しまっ…！

次の瞬間、賊の剣が肉を斬る音がした。

「……一回は…」

「なっ、なんだてめぇは！」

「一回だぁ！！」

「がっ…！うぅ……」

…何？

「……どこの馬鹿が自分よりも強い相手に突っ込んでるかと思えば…君だったのか。なかなか面白いことをしてくれたね」

「…あなたは……この前陳留の街であった…」

「お前がただ籠を売る村娘だとは最初から思っていなかった」
そう淡々と話を述べるその方の右腕は、私を庇って賊の剣を食らったせいで白い服を赤い血で染めていた。
「だ、大丈夫ですか？」
「……それよりもだ」
が、その方はなんともない顔をしながら賊の方を向かった。
「……多いな。遠くで見るほどずっと多い」
「何だ、貴様は！」
「構うな。全部ヤッちまえ！」
「……盾兵、構え」
賊が再び襲ってくる前に、殿方は大丈夫な左手の指を鳴らした。
その途端、両方から官軍の兵たちが現れて我々の前に盾を作った。
そしたら、
「ぐっ！眩しい！」
「ぐあああーー！！」
「これは…どういう？」
「今は丁度昼時。世を暖かく包む光が、もっとも致命的な武器なれる時だ」
その時私は気づいた。
官軍たちの盾が光っていた。
「…太陽の光を…？」
「盾が太陽を良く反射させるように断面を綺麗にしただけだ。後は

太陽を良く反射できるような位置に居ることさえちゃんとすれば……うっ」
「大丈夫ですか？！」
話の途中で膝を地面に付く殿方を見て私は直ぐにその方を支えた。
傷がかなり深い。早く血止めしないと……
「……糖分が足りない。これだから戦場は嫌いだ」
「何を言っているのですか！」
どうやら血を流しすぎて錯乱が来ているようだ。
後ろに居た義勇兵から包帯をもらって傷の上を圧迫させた。
「…ちっ、風が悪い。雲が来る」
「はい？」
風向きの方を見ると、大きな雲がこっちに向かってきている。
太陽が雲に塞がれば、あの盾も使えない。
「義勇軍を連れて後退しろ。こっちはもうすぐ本隊が来る」
「それも数が少ないと聞いています！官軍と言っても、この数の差じゃ勝てません！」
「だからこっちももうすぐお前たちが行った村へ向かう。陳留から援軍が来るまで村を死守すれば良い」
「……どうしてここまでして我々を助けようとしたのですか？」
私には理解しかねた。
官軍が、明らかに悪い状況であった我々を助けるために、しかも指揮官が傷を負ってまで個人である私を助けた。
何故赤の他人にそこまで出来るんだ？

「君は何故太陽が毎朝君の部屋の中に光を注いでくれるのかを悩むか？重要なのは何故こんなことが起きているかじゃない。どうやって起きた状況を己のために利用するかだ。分かったら、さっさと行け」
「……！！」

周りを見る。
雲はもう直ぐそこに来ている。
官軍の本隊はまだ届きそうにない。
私たちがここを去ったら、残ったこの方と官軍の盾兵たちは生きれない。

「私たちはまだ戦えます。あなた方と一緒に戦います！」
「……楽文謙」
「はい」
「君はやっぱり興味深い。是非とも俺の部下に欲しい」
「あ」

そう言いながら、殿方力をなくして座り込んでいた体を無理矢理起こした。
腰を少し曲げて、老人のように前を見る。
怪我をした腕と丈夫な手をがたがた震えながら無理矢理袴の小袋に突っ込んで立ってる姿は、とても不安定だった。
けど、その顔は血が抜けて白くても決して不安な様子も、焦ってる様子もなかった。
「君は俺の興味に十分応えてくれた。

今度は俺が君に興味を待たせる番だな」

この方は……いったい何者なのだろう。

八話（後書き）

ふと気づくと一刀を特になんの意味もなく負傷させていた。
……いや、展開的には意味あるのですけどね。割りとそうしなくても良かったんじゃね？というところで負傷させはったなーと思ってます。
にも関わらず平然としてる一刀ですけどね。

最近こっちの更新速度が早くなってるのは恐らく小説を読もうのところで地味に受けてるのが響いてるはず。（と、ＴＩＮＡＭＩに書きました）
最初に作る時はネタのつもりだったのにどうしてここまで来たのやら……

九話（前書き）

諸事情で早く書くことになりました。
読者の方から見るときっと損な話ではないはず……うん。

※注意：この作者が書く外史は基本的には実力問題で戦闘に関しては大分描写されません。

九話

華琳ＳＩＤＥ

「皆集まったわね」

夜、私は春蘭と秋蘭、桂花を集めさせて言った。

「今さっき討伐に出た季衣から報告が入ったわ。賊の遭遇したけど、その数は二千以上」

「二千！？」

「確か季衣と北郷が連れて言った兵は五百ぐらいしかないはずです」

「そう、追われていた義勇軍と合流して戦ったけどその後直ぐに近くの村に後退したそうよ」

三人は驚いて、特に春蘭は季衣のことが心配なのか、今でも出ていきたい気持ちで山々なのが目に見えている。

「ええい、北郷は一体何をしていたのだ！季衣を危険な目に合わせるなど、決して許さん！」

「とにかく、至急に兵を集めさせます」

「既にやっているわ。明日の昼頃には三千ぐらいはあつまるでしょう」

「華琳さま！私だけでも先に行かせてください！」

「ダメよ」

春蘭が焦っているのも分かる。

季衣はここに来てから春蘭に良く懐かれて、まるで本当の姉妹かのように仲良くしていた。

まだ小さい季衣に何が起きたか心配なのでしょうね。
だけど

「春蘭、あなたが焦るのもわかるけど、あなたが数少い兵で援軍に行ったところで、焼け石に水。兵だけ消耗するだけよ」
「しかし…！」
「安心しなさい。助けないと言ってるわけじゃないでしょ？出来るだけ早く準備を整えて、万全に賊を叩く準備をして向かわなければ、季衣を助けることはできないわ」
「…うぅ…では、私は早く出立出来るように役人たちを促してきます！」

春蘭はそう言って私に断りもせず外へ向かった。
相当慌ててるわね。かわいいわ。
でも、興奮して役人を斬ったりしないかちょっと心配ね。

「華琳さま、アイツは何をしていたのですか？」
「『アイツ』とは…？」

桂花が言ってる意味を知っていながら私は聞き返した。

「北郷のことです。元ならあいつが大将なはずなのに、季衣に全部押し付けて更には村で孤立状態。元なら、あそこで義勇軍があっても構わず、こっちに伝達して待機するべきです。何故アイツは季衣を止めなかったのですか？」
「確かに私もそれは疑問です。北郷の普段の性格なら、勝てない戦はしようとしないはず。それが今回は何故…」
「その一刀なのだけれど……」

私は残った秋蘭と桂花の顔を交互に見て、落ち着いた顔で言った。

「義勇軍の殿部隊を助けてる途中で負傷したらしいわ」
「「！！」」
それを聞いて秋蘭は平静な顔を崩して、桂花は真っ青になった。
＞ｐｆ＜
季衣ＳＩＤＥ
一度黄巾党たちと戦ったけど、数が多すぎてとても戦線を維持できそうになかったから反転して、残っていた義勇軍と一緒に残りの義勇軍たちが向かったという村に逃げたよ。
逃げること自体は別に問題なかったのだけど、問題なのは……
「……」
「お兄ちゃん……」
お兄ちゃんが楽進という義勇軍の隊長を守るために賊に腕を斬られてしまったよ。
傷は腕に結構深くまで入ってしまって、その場で血止めをしたにも関わらず、逃げてる間貧血で倒れちゃったよ。
それだけならまだいいけど、衛生兵の話によると、肉まで斬られると、傷が治っても斬られた筋肉を直すことは難しいらしく、このままだと右腕を自由に使えなくなるかもしれないって……
「……っ！」
いけない。

ボクがこうしてると、他の兵たちの士気まで落ちてしまうよ。
まだ賊が来てない今は、義勇軍たちと力を合わせて村を砦のように囲んで防衛戦のための準備をしてくれているけど、戦いが始まったらボク一人で皆を守らなければいけない。
ボクが頑張らないと……ボクが無茶をしたせいで兵たちもお兄ちゃんもここで死んでしまう。
そんなことは絶対にさせない……！

「許褚将軍、よろしいですか？」

後ろから義勇軍の代表級の人、楽進が来たよ。

「斥候に出ていた官軍の兵が戻ってきました。賊の群れがこっちに向かって近づいているらしいです。防衛のための準備はほぼ完了しています」
「……わかったよ。直ぐに行くよ」
「はい……あの、申し訳ありません」
「楽進さんのせいじゃないよ。お兄ちゃんを行かせたのはボクだから」

ボクはお兄ちゃんが寝ている寝床から楽進さんに目を向けたよ。

「それより、楽進さん」
「はい」
「この村で、なんとしてでもあの賊たちを食い止めよう。一緒に皆を守ろう」
「…はい」

ボクは楽進さんと一緒にお兄ちゃんが居る負傷兵たちのための天幕を出たよ。

＞pf＜

「村大通りの東西南北四カ所に主な柵立てておるで。賊は最初は西側から来るだろうけど、そのうち四面包囲される形になるやろう」

「結局四カ所全部防衛兵力を置かないと駄目ってことか」

「なんかもう絶望的なの」

「諦めちゃ駄目だよ！」

ボクは楽進さんと、他の義勇軍を率いる代表二人と話をしていた。

「ボクたちはボクたちを信じてここまで戦ってきてくれた人たちと共に居るんだよ。あの人たちの信頼に答えるためにもそんな弱音を吐いていちゃ駄目」

「……そうですね。なんとしても皆を守らなければならないという覚悟で行きます」

「許褚ちゃん、年下なのにしっかりもんやな」

「ほんとなの」

「こら、二人ともそういう言い方はやめろ。官軍の将軍さまだぞ？」

「良いよ、別に。幼いのは見ての通りだし」

今までは春蘭さまや秋蘭さまが居たけど、今回はお兄ちゃんも駄目でボク一人。

ボク一人で五百の官軍と三百弱の義勇兵たちを守らないと行けない。

「敵が一番最初に来そうな西側にはボクが先ず居るよ。他の三箇所は兵たちに言っておいたから楽進さんたちが指揮を取って。何かあったら直ぐに連携出来るようにするから」

「はい」

「わかったの」

「夜まで地獄絵図やで……皆気をつけてな」
「うん…」

ここからが本番。
春蘭さまたちが来るまでなんとしてもここを守る。

＞pf＜

一刀ＳＩＤＥ

……
目を開ける力さえも出ない朦朧な意識の中で、俺は考えた。
俺は正しい選択をしたのか。

俺にとって『正しい』とは『興味のあるもの』のために動いたか。

幼い時、俺から全てを奪い取った熱病は、代わりに違うものをくれて行った。

世界はいつも決まった方向にしか動かなかった。
ただ人類にはそれが理解できなかったけど、人類はいつも一つの大きな道から外れたことがなかった。
俺にはそれが見えていて、他の者にはそれが見えなかっただけのことだった。
全てを理解している上で生きる世界はとても興味のないものだった。
俺は何度も死ぬつもりでいた。
でもその度に俺の中に囁く声があった。

『興味』が欲しかった。
俺が欲しいのはただ『興味』。

俺の予想をはずれてくれる世の異端者たち。
それは時には英雄、時には悪党、相手が善を名乗っても悪を名乗っても構わなかった。
相手が俺の『興味』に応えてくれるのだったら、
俺はこの身に何一つ残らなくなるまで世界を見ることが出来る。

「……っっ」

右腕がちぎれそうに痛い。
だけど顔には出さない。
予想できているものに感情を表すほど、俺は易いに人間ではない。

外から戦う音が聞こえる。
剣の音、何かが壊れる音、悲鳴、喚声、銅鑼の音……

外は夜が近い様子。
もう直ぐ黄巾党も引いて行くだろう。
少数で奇襲をかけたいところだが、今の兵たちでは疲労が溜まりすぎているだろう。
このまま明日に備えた方が良い。

＞pf＜

凪ＳＩＤＥ

「皆、もう少し頑張ってくれ！もうすぐ賊も引いていく！」

日が落ちて行って、賊の攻めもどんどん勢いを失っていく。
今までどれだけの人たちがここを守るために死んでいったのだろう。
後どれだけの人たちが私の過ちのせいで死んでいかなければいかないのだろう。

「はぁあああああーーー！！！」

今日で何十発目か知らない気弾を拳に込めて薙ぎ払う。
体から力が一気に抜けていく。
まだ……まだ倒れるわけにはいかない。立て！まだいける！まだ戦える！

「楽進さま、無理をなさらないでください」

隣に居た、故郷の村から出発する時から付いて来てくれた兵が心配そうにそう言ってくれた。

「……私は大丈夫だ。……！」

その時、私はその兵の胸を見た。

「お前……！」
「あ…大した傷じゃありません」
「……！」

そいつの胸には賊の弓兵に受けたらしき矢が刺されていた。
抜くと同時に血が噴き出るだろう。もう助けることはできない。
後もうちょっとだというのに……！！

「楽進さま、俺はあなたと一緒に戦った日々を忘れません。あなた

と共に闘った数ヶ月のために今この年まで生きてきたと言っても良いです」
「お前……」
「どうせ俺はここで死ぬでしょう。だけど、楽進さま、あなたはこんなところで死んではなりません。あなた様は、もっともっと大きくなる器だと俺は信じてます」
「……私にそんなことが出来るか…」
私を信じてくれた人たちさえも守れないこの私が……これ以上何になれるというんだ？
「さあ、今夜が俺にとっては最後の日！てめぇら、隊長には指一本触れさせねー！！」
その兵はそう叫んで、柵を壊して迫ってくる賊たちに突っ込んでいった。
そして、次の瞬間倒れるその兵の姿が、私がその夜最後に見た姿だった。

「大人と子供の差は大したものじゃない。ただ自分の身の程を知っているか否か、それが違いなだけだ」
「……」
「休め。見ては居ないが、この修羅場で君が生きているだけで十分に俺の興味に応えてくれた」
・・・

・・
・
＞pf＜

真桜ＳＩＤＥ

日が落ちて、賊は後退したで。
やっと一息できる、と思えば話はええけど、ウチの兵の被害も無視できないほどだった。
それに、作っておいた柵も半分以上壊れてる。
村の中には柵を十分に修復出来るほどの材料も残ってへん。
なんとか明日もアレで凌ぐしかないけど、あの感じだと明日の昼まで保つかどうか……

「真桜ちゃん！凪ちゃん見なかったの？」
「いや、知らへんけど……」

修復作業の監督をしていたところ、沙和がやってきた。

「どこにも居ないよ！義務室にも行ったけど居なかったの」

馬鹿な…！凪が死ぬなんてそんなのありえん！
きっとあいつのことだから、どこかで自責しているに違いない。

「ウチが探してみるで。沙和は安心して負傷兵たちの治療の方を頼

むで」
「わ、分かったの。見つけたら直ぐ沙和にも教えてなの」
「ああ」
ウチは作業場から離れて、街の隅々まで探すつもりで先ずは中央に向かったで。
その時、あの人がそこに居たんや。
「君が李典か？」
昼殿の凪を助けてくれたという官軍の将の兄さんがそこに立っていた。
「せやけど……兄さんは確か官軍の……倒れてたんじゃあらんかったの？」
「俺のことは良い。それより、これを見てくれ」
突然、その官軍の兄さん紙一つを差し出した。
「あの、悪いけど、今ウチちっと忙しいんやけど……そういうのは許褚ちゃんと…」
「楽文謙なら、俺の天幕で寝ている。戦で力尽きて倒れたのを持っていった」
「なっ！そうだったんか」
まったく、凪の奴無茶しやがって……。
「義勇軍の隊長は彼女だな？」
「うん？ああ、まぁ、基本的なことは三人で一緒に決めてたんやけ

ど、戦になると大体隊長は凪がしてたな……」
「で、自分たちよりも明らかに数が多い敵に突っ込んだと」
「そういうことじゃあらへん！凪が悪かったわけじゃあらへん！」
最初は少ない数だったんだ。突然すんげえ数の援軍が現われて、気づいていたらウチが圧倒的に不利になってた。
「周りをちゃんと確認していたらそうはならなかったこと…兵の命を守るべき指揮官としてあるまじきことだな」
「凪を貶すつもりならもう行ってええか？官軍が助けてくれたことも、兄さんが凪を助けてくれたのも感謝するけど、ウチらはウチらが正しいと思ったことをやってるつもりやで」
ウチは真剣な目でその兄さんに言った。
「……彼女が言った通りの者で間違い無いとみた」
「あん？」
「それより、李典。君はからくり造りなので腕が立つらしいが、これを見てくれ」
「……」
ウチはその兄さんが差し出した紙を取って内容を見た。
最初はただのこの村の地図だと思ったけど、良く思ったら違った。
これは……陣？
「何や、これは？」
「造れるか？」
「造るって……村をコンナにするっていうねん？」
「察しが良い」
「んな無茶な……こんな風にしたら村がどうなると思ってるねん」

「それでも村の被害は最小限にしたつもりだ。どうせこのままでは明日の賊の攻撃に昼がすぎる前に防衛戦が落ちる」
「っ……！それは……」
「村長らの説得はこっちに任せろ。お前は兵たちを総動員して明日まで村をその形に作ってくれ」
「……」

この兄さん、いったい何者なん？

「出来るか？」
「……ああ、任しときぃ。ウチの名に賭けてこれよりも更にええもんに作ってやる」
「いや、ものはその地図の形で良い」

＞pf＜

季衣ＳＩＤＥ

「お兄ちゃん！」

ボクの天幕に来たお兄ちゃんを見てボクはひとまず怒鳴り上げた。

「一体どこに行ってたの？！兵士さんにお兄ちゃんが義務室に居ないと言われてボクほんとびっくりしたんだよ！」
「何だ、許楮、心配していたのか？」
「当たり前じゃない！！」

……あ

「あ、…えっと、だから…」
「……当然だな。俺の身にこれ以上何があったら典韋を見る面目が立たない」
「そ、そ、そう。それだよ。だからだよ」

うん……

「そ、それで、いったいどこに行ってたの？腕は大丈夫なの？」
「問題はない。どうせ今後使えない腕だ。これ以上痛くなったところで何も変わらない」
「何が大丈夫なんだよ、この馬鹿！」

思わず岩打武反魔（いわだむはんま）を投げ出して、お兄ちゃんの足元手前にぼっかりと穴が空いたよ。

「…良いから休んで！」
「俺の天幕は文謙に貸してしまってな」
「っ……！じゃあ、ここで寝て！」
「お前はどうするつもりだ？」
「ボクは他の所でも大丈夫だから」
「大将が自分の天幕を部下にゆずしては示しがつかない。その話は呑めないな」

じゃあ、ボクにどうしろと言うんだよ……！

「…じゃあ、じゃあ、ボクもここで寝たらいいじゃない！」
「……」

……

「……まぁ、良いだろう。そろそろ歩くのも疲れて来たところだ」
お兄ちゃんはそう言ってボクを通り過ぎてボクの布団に入ったよ。
「まさか病者に毛布を敷いて寝ろとは言わないだろうな」
「……」
「……お休み」
お兄ちゃんはそのまま動かなくなったよ。
……いや、死んだんじゃないよ。寝ちゃったんだよ。
ほんとはもっと疲れてたんだね…
「ボクも眠いのに……」
毛布を持って来たくても、もう皆に配った後だから今更行くのも悪いし……
「……」
仕方なく、ほんとに仕方なく、ボクはお兄ちゃんが先に眠りついた布団に潜り込んだよ。
「……起きないよね」
「……」
「……お休み、お兄ちゃん」
・・・
・・

・

＞pf＜

華琳ＳＩＤＥ

「何これ……」

春蘭に加えて、秋蘭と桂花、増しては病状に居た流琉まで話を聞いては兵を集めて出立の準備時間を縮ませてくれたおかげで、私たちは朝に出発、昼すぎる頃に最後に報告が届いた村まで辿りつくことができた。
でも、私たちが来た時には、既に全て遅れていた。

一刀たちは見事に勝利していた。
私が見た姿は村の中央で黄巾党の死体が並んでる姿だった。

「一体どういうことなの？」
「……これだ」

一刀が差し出したのは、村の地図だった。
だけど、少し形がおかしかった。

「何これ……村の姿が陣になってるじゃない」

桂花も横でそれを見て驚いていた。
後ろでは春蘭が一刀を斬りかかろうとするのを秋蘭と季衣がなんとか塞いでいた。
地図に描かれている街の様子はまるで大きな陣を描くような形になっていた。
驚いたのは私も同じだった。だって……
「これって、私が考えていた陣とほぼ同じじゃない。考えはしていたけど、誰にも言ったことはないのに、どういうことなの？」
「『八門禁鎖陣』。孟徳の考えを少し貸してもらったぞ。まぁ、丸写しではない。ちゃんと俺流だ」
「なんですって…？」
確かに、私が考えていたのとは少し形が違った。
ちょっとツメが甘いと思っていたところがちゃんと補われている。
「どういうこと？あなた、人の考えでも読めるというの？」
「……」
私は無言のまま私の前に立っている一刀をただ見つめた。
怒ってるわけじゃない。ただ、ほんとに、この男と居ると暇しないって思っただけ。
「兄様ーー！！」
「っ！！！」
そんな時、流琉が一刀に抱きついて一刀はそのまま後ろに倒れた。
「兄様の馬鹿！人には無理するなって言っておいて、なんですかこ

れって！どうしてこんなになっちゃったんですか！」
「……典韋。何故ここに居る」
「兄様が心配で来たに決まってます！最初から私が来ていたら、風邪ぐらいかかっていたところで腕を斬られるなんて間抜けなことしません！」
「…ああ、そうだな。典韋の実力はそんなものじゃない」
「……兄様……」

流琉は泣いていた。
この中で一番一刀のことを心配していたのはきっと流琉でしょうね。
でも、流琉。

「流琉、そろそろ一刀の上から退いて頂戴。一刀が腕が痛んで苦しんでるわよ？」
「え？ああ、ごめんなさい！兄様！」
「……いや、なんともない」

嘘言いなさい。

「それで、一刀。その後ろに居る娘たちは？」

私は後ろに立ち下がっている三人の娘たちについて一刀に聞いた。

「義勇軍の代表者たちだ。彼女たちが居なければあの陣は実現できなかっただろう」
「へー。随分と高評価じゃない。もしかして、以前言っていた人材って？」
「……彼女だ…文謙、彼女が陳留の刺史、曹孟徳だ」

三つ編みの、武人のような女の子が、少し疲れた様子で前に出た。

「楽進と申します。字は文謙。此度は一刀様のおかげで命を助かって頂きました」
「…どういうこと？」
「一刀様の傷、実は他の義勇軍たちを逃がす間殿を務めていた私が危険な時を庇ってくれた時に出来たものです」
「……！」

そう、そういうわけだったのね。

「あなたとしては随分と荒れたことをしたわね」
「彼女には俺の腕一つぐらいの価値はある」
「そう……あなたがそれほど高く評価しているぐらいなら、私も文句出せないでしょうね」

季衣と流琉はなんとしてでも離そうとしていたくせに、自分が思った者のためには自分の身の安全も顧みないか……そういうところ、才を好むと自称する私も見習うべきかもしれないわね。

「なら、楽文謙。私の名は曹孟徳。この度に私の戦列に加わるつもりはないかしら」
「はっ。ただ、3つだけお願いがあります。宜しいでしょうか」
「あなたも3つ？」
「はい？」
「…あ、いえ、なんでもないわ。申してみなさい」

思わず昔のこと思い出しちゃったわ。

「先ず、先に逝った義勇軍の共たちの遺体を集めて葬礼させてあげるまで時間を与えてください」

「そう…それぐらいは当然でしょう。2つ目は？」
「2つ目は、私の後ろに居る二人の親友、沙和と真桜も、華琳さまの戦列に加わらせてください」
「…人材が増えることに越したことはないわ。こっちからも願ったものよ。最後は何？」
「最後は…私を一刀様の部下として華琳さまの戦列に加わらせてください」
「へ？」

あまりにも以外な発言だったので、私は一刀を一度振り向いた。
彼の顔にも少なからず驚いた様子が見えた。

もちろん、彼が拾った人材だし、以前から彼は仕事に押されていたから彼女たちのことは一刀にまかせようとしていた。
でも、文謙本人から買って出るなんて……あの男がどれほど恐ろしい男が知らないのか。

「……楽文謙」
「一刀様は二度も私の命を戦場で拾ってくれたお方です。どうかお側で仕えながらその恩を返させてください」
「ねえ、真桜ちゃん。凪ちゃんがあの人の部下になると、沙和たちも一緒に入るのかな」
「そうなるな……ウチはああいう人はちっと苦手なにゃけどな」
「沙和も、ちょっと怖いの……」

後ろの二人の反応が正しい反応。
やっぱり、この子、ちょっとおかしい。

「…俺は部下を選ぶぞ」

「はいっ！必ずやご期待に添えて見せます！」

やめなさい、あなた！
死ぬわよ？戦場じゃなくて部屋の中で過労死するからやめなさい！

「孟徳、失礼なことを思って居ないか？」
「別に彼女を思ったまでよ？」
「……」
「何？」
「……まぁ、いいだろう。荀？！」
「ひゃっ！な、何よ」

一刀は興味を楽進から桂花に移した。

「俺が出した宿題はできてるか？」
「そ、それは……その、アレよ！あんたが負傷したせいで、私もいろいろ忙しかったから……！」
「できてるか？」
「……できなかったわ」
「……」
「だって仕方ないでしょ！あんたも倒れたって言うし、季衣一人だけじゃ何倍もする敵相手にどうなるか分からないし……だから…ひゃっ！」

突然、一刀が桂花の耳元に何か囁いた。

「んじゃあ、俺は先に退かせてもらう」
「なっ、一刀様？」
「先にって、まだこっちはやることが残ってるのよ？あなたが酷い様にした村も復旧しないといけないし」

「その他にもある」
「なんですって？」
「孟徳たちに無駄足をかかせてしまったからな。そのお詫びだ。大きな手柄あるからそれを荀？に教えてあげた。じゃ、そういうわけだから……典韋、帰るぞ」
「へ？兄様、ひゃっ！」

そして、一刀はそのまま流琉を拉致してどっかへ行ってしまった。あのまま馬一頭だけで帰るつもりでしょうね。

「あの、孟徳さま。一刀様は」
「私のことは華琳って言いなさい。後ろの二人もよ。あ、後、あいつの部下をするときっと腰が曲がるほど無茶ぶり言われるはずだから、帰ったらせいぜい頑張りなさい」
「はいっ！」
「ふえぇ、嫌なの」
「何か嫌な予感がするで……」

最後に一刀、ちょっと嬉しそうな顔だった気がするけど……まさか、気のせいだよね。

・・・
・・
・

九話（後書き）

もうすぐハロウィーンですね。
韓国ではハロウィーンなんてそんなもの祝いません。
家で静かに南瓜でも食べているつもりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7787w/

人類には早すぎた御使いが恋姫入り

2011年10月28日20時07分発行